

# 教職大学院 Newsletter

# No. 139

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.11.24 (公開版)

## 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Summer Session Zone Sessions を振り返って

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院では、2020年6月20日(土)、21日(日)の両日、実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Summer Session を開催しました。2001年より始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回で39回目を数えることとなります。

今回のラウンドテーブルは新型コロナウイルス感染症拡大防止のためオンラインでの開催となりました。

これまでのオンサイト開催とは異なる緊張感や不安も感じながらの開催でしたが、2日間で延べ約900名とたいへん多くの皆様の参加を得ることができたことは望外の喜びです。また、オンライン開催によって嶺南地域や他県の皆様の負担を軽減できただけでなく、海外(在外教育施設等)からもご参加いただくことができました。

6つのテーマに即した Zone Sessions (6月20日)では、各 Zone でこれまで取り組んできたテーマに沿いつつ、コロナ禍の下で、子どもたち、教師をはじめとする専門職、コミュニティの学びを如何に展開し発展させるか、活発なディスカッションが展開されました。

本号の後半では、6月20日に実施した、6つのテーマに即した Zone Sessions にご参加の皆様からお寄せいただいた振り返りをご紹介します。

実践し  
省察する  
コミュニティ

Round Tables:  
Summer Sessions 2020  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
At University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル  
2020 Summer Sessions  
20(sat) 13:00-17:40  
21(sun) 10:00-14:10  
Cyber Space Co-inquiry and Reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2020.6.20-21

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院  
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科  
共催 社会教育実践研究フォーラム

### 内容

- スタッフ自己紹介 (2)
- インターンシップ/金曜カンファレンス報告 (6)
- ミドルリーダー/マネジメントコースだより (9)
- 夏期集中講座を振り返って (15)
- ラウンドテーブル Zone Sessions を振り返って (23)

## スタッフ自己紹介



### 岐阜聖徳学園大学/福井大学連合教職大学院 准教授 阿部 慶賀

今年度より福井大学連合教職大学院のスタッフに加えていただくことになりました、岐阜聖徳学園大学の阿部慶賀と申します。本務校では学校心理専修の所属ということで、心理

学を扱っていますが、その中でもさらに学校現場との縁がなさそうな認知科学・認知心理学を扱っています。本学の学生も、カウンセリングに直結する臨床心理学や、学級集団や対人関係を扱う社会心理学には強い興味を持つ学生は多いのですが、名前から内容が想像しにくい認知心理学に関心を抱く人は残念ながら多くありません。むしろ、一度現場に出た先生がたの方が興味をもっているという印象すらあります。認知科学は「認」識と「知」識を扱う科学です。人間の知的なふるまいなら何でも扱う無節操さがある一方で、人の思考や学習を情報処理として理解しようとする特徴があります。その意味では、人の学びもまた人の知的なふるまいですので、研究トピックとしてよく扱われています。

大学では教育学部を卒業し、もともとは小学校教員を目指していました。しかし、学部2年生のころに佐伯胖先生の「新コンピュータと教育」を読み、機械音痴の人の心境や、情報機器の活用行動に関心をもち、そこから人間の機転や創造性を研究するようになり、今に至ります。前職では情報教育にも携わっており、主に情報リテラシーの世代間比較を扱っていました。

こうした認知科学研究、情報教育業務に携わって実感したこととして、「子ども(にかぎらず人間一般)の誤った行動の背後には、かならず原因や、彼ら彼女らなりの理屈がある」ということ、「誤りは能動的に問題に対処しようとした結果である(思考放棄する

ならそもそも回答する行動すら起こさない)」ということが挙げられます。算数の文章題でつまづく子どもは、計算自体はできるのに、問題文そのものの不自然さに納得できずにいることがあります。漢字の書き順を守らない子は、そもそも書き順を守らなくてはならない理由を説明されていなかったり、説明に納得していなかったりします。また、情報機器の操作でも、エンジニアたちは「何もしていないのに挙動がおかしい」と苦しむユーザの声を馬鹿にすることがありますが、昨今のICT機器の多くはユーザの目が届いていない合間に自動・強制的なアップデート、仕様変更が行われることも少なくありません。そうした状況をユーザ視点に立って考えれば「何もしていないのに変わった」と見えるはずですが、こうした誤りやつまづきには、人が誤った行動を起こしてしまう環境要因や、迷ったときに選んでしまう行動傾向のヒントがあるはずで、愚かな誤りとして片づけられません。それらを科学的に検討することこそが、認知科学の役目であるとも考えられます。

話を戻し、連合教職大学院に目を向けますと、ここでは定期的に院生や現場の教員たちの実践報告が蓄積されています。そこには成功事例だけでなく、失敗経験や困難の現状を綴った報告もあります(どうか、むしろその方が多い?)。こうして先人や現役の院生、先生がたが集約してきた足跡を、ただの個別事例として片づけるのではなく、その背後にある機序を科学的にとらえるべきではないかと個人的には考えております。現場に立つことがない私の役目としては、院生の皆さんや先生方の現場経験を科学の俎上にのせることです。この務めが全うできるよう、精進していく所存ですのでよろしく願いいたします。

## 院生1年目の気持ちで

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 河合 恭江



縁あって、今年度連合教職大学院のスタッフとして加えていただきました。よろしく

お願いいたします。

私が教員としてスタートした年は56豪雪。そして37年ぶりの大雪を記録した年に38年間の教職生活を終えました。小学校2年、中学校4年、小学校8年、県教育研究所2年、小学校5年、中学校5年、県教育庁3年、以後小学校3校で教頭、校長合わせて9年。突然の異動や異校種や行政への異動など、思ってもいない転機が何度もありましたがそれぞれに貴重な経験をさせていただきました。

初任校では、同期と1年上の先輩と3人の下宿生活でした。週に1回程度、夕食をすませた後、当時研究主任だった中堅の先生の家で3人でおじゃまして授業や学級経営について語り合いました。また月1回、土曜日の午後、その先生が主となって開催している主体的学習サークルに参加し、いろいろな学校から参加されている先生方との教材研究が楽しかったものです。

福井市内の小学校に勤務していた時に、月1回、これも土曜日の午後、算数サークルに参加して、メンバーとアイデアを出し合って算数の教材開発や教具づくりに取り組みました。また、マルチメディアスタディサークルの一員として、マルチメディアを活用したインタラクティブ（双方向）のパソコンソフト作成をしました。今から20数年前のことです。今でこそ、ソフトが進化して容易に動画や音声を取り込んでプレゼンテーションができますが、当時は複雑な作業でした。福井の偉人のことを楽しく学ぶことができる学習ソフトなどを作成しました。

同じころ、希望する学校にテレビ電話が貸与されました。市街地の学校に勤務していたので、市内の海・山・農村地帯にある学校とテレビ会議をして学校の周りの様子を紹介し合う活動をしました。冬に、

暖かい地方にある鹿児島県の学校とテレビ会議をした時には、校庭が雪で真っ白な福井の様子を驚いていたのが印象に残っています。「桃太郎」の話を方言で言い合っただけの方言の学習も行いました。今は日常に行われているオンライン会議ですが、音声より遅れて動く画像でも遠隔の学校とリアルタイムに交流できる楽しさを味わったものです。

退職した今思い出すのは、忙しい中にも自らが求めて楽しんでやったことです。

現在は、福井市生涯学習課社会教育指導員として福井市中央公民館に勤務して3年目になります。社会教育事業に携わりながら、人は、学ぶことや人とのつながりが生きがいとなっていることを感じています。

恥ずかしながら、これまで、元同僚や知り合いが頑張っている様子を学校に送られてくるニュースレターで読む程度の教職大学院との関わりでした。社会教育指導員となってから、ラウンドテーブルにコミュニティのZoneがあるのを知りましたが、自分には無縁のこととと思っていました。そんな私にこのご縁をいただいたわけです。新学習指導要領や働き方改革に向け動き始めていたころに学校を離れて2年。学校現場は急速に変化しており、教職大学院のことに無知な私に何ができるのか、不安だらけのスタートでした。加えてコロナ禍で、大学も学校も「これまで通りに」が全くできない新年度の始まりでした。まもなく半年が過ぎ後期を迎えようとしています。

FDや合同カンファレンスで、教育改革の動向や各学校のコロナ禍での状況など最新の情報を得ています。学校訪問では、感染防止に取り組みながらも、子どもたちの主体的な活動を何とか展開したいと知恵を絞られている教育現場の様子を目の当たりにしています。ラウンドテーブルでは、いろいろな職業や立場の人からの一つ一つの言葉が心に響き、これからの自分の刺激になりました。週間カンファレンス

では、M1生の思いに共感しつつ、M2生の言動に成長を感じました。夏季集中講座では、1年目の院生と同じ実践書や理論書をひたすら読み、いわゆる「理論」と「実践」の往還をしました。1日目から3日目にかけて、またCycle1からCycle3にかけて、院生の皆さんの考えがどんどん練り上がっていくのを実感し、こうして教育者としての高い専門性が築かれていくのだと思いました。私にとって、全てが新鮮な学びとなっています。



## 福井大学連合教職大学院 非常勤講師 嶋田 直美

今年度から教職大学院のスタッフに加えていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。大学の先生

からのお声がけを得て勤めさせていただくこととなりましたが、こんな私でいいのかなと不安になりながらの日々です。

私は主に福井市内の中学校で数学の教師として勤務し、一時期、県教育研究所や県教育庁義務教育課に勤め、その後、管理職として市内小学校（併設幼稚園を含む）で勤務し4年前に退職しました。退職後は、福井市生涯学習課の社会教育指導員として、公民館の方と一緒にこれまで経験してこなかった社会教育の場で仕事をさせていただきました。

学校に勤めていたとき、「分かる、できる、そして楽しい算数・数学の授業」を目指し仲間の先生方と一緒に切磋琢磨してきたこと、生徒が主体的に関わる学年づくりなど特別活動を中心に実践してきた時期、カリキュラムや組織マネジメントについて考え取り組んできた時期など、今振り返ってみると、その時その時に、たくさんの方々から教えられ、育てていただいたと感じています。今更ながら感謝しています。また、その頃、教員として働く中で忙しいからこそ自分を充電させるため、研修以外に学ぶ場がほしいと願っていたことを思い出しました。（その頃、このような教職大学院があれば・・・）

Web会議も貴重な経験でしたが、1年目の私にとっては、対面している時には可能な、すき間の時間でのちょっとした雑談ができない苦しさも感じました。後期はオンサイトも取り入れられるとのこと。どんな出会いや学びが待っているかワクワクします。様々な年代・校種・職種の方々、実践を語り合い、聴き合い、考え合いながら、1年目の院生の気持ちで学んでいきたいと思っています

さて、今年はコロナ禍。先が見えない中、学校では子どもたちの学びやつながりを確保するため、「子供たちにとってよいことならどんなことでもやる。」という思いで、先生方は試行錯誤しながら活動されていきました。中学校を訪問させていただいたときも、授業が大事なのは分かっているがなかなかできる時期ではなかったと思いますが、工夫しつつ授業研究に積極的に取り組んでおられました。その時、どの先生方の姿も明るく意欲的で、生徒とふれあい、共に学び深め合うことを心から願い、その成長を楽しみにしていることがよく分かりました。「これだから学校っていいなあ。」と思った瞬間でした。

しかし一方で、急激な社会の変化の下、働き方改革、ICT教育、行事の見直しなど、これまでの慣例にとらわれず、子どもたちにとって大切なことを見極め、未来に向け大胆に学校を変えていくことが求められています。そのためには、組織のありかたや一層の教員の授業力向上、先見性のあるリーダーシップなども必要になり、学校現場の大変さを痛感します。

ところで、4月からのカンファレンスやラウンドテーブルなどはオンラインでした。どきどきしながらのZoom初体験でしたが、遠方の方とも時間ロスなくつながり合うことができ、そのよさを体験することができました。実際に顔を突き合わせて話し合う時の充実感には及ばないとは思いますが、たくさん

の方との出会いで、学びを深めることができたと思います。私が出会った先生方は皆さん本当にすばらしい方ばかりで、真摯に学ぶ姿勢や困難状況の中でも子どもたちに学ぶ力を付けさせ、意義のある楽しい学校生活を送らせたいという熱意に溢れていました。私すらも元気をいただきました。カンファレンスやラウンドテーブルは、日々悩みながら実践されていることを報告し合ったり、互いに考えを述べ合

ったりする場ですが、これからの実践をさらに発展させてるためのパワーを充電する場にもなったことと思います。

微力ではありますが、学校を支える一助として少しでもお役に立てるよう、私自身さらに研鑽に励み、皆さんと共に学びながら成長していきたいと思いません。どうぞよろしくお願いいたします。

## 福井大学連合教職大学院 非常勤講師 橋本 久代



福井県の教職を退いて2年目です。令和2年4月よりこの教職大学院で非常勤講師として勤務しております。現役時代は、小学

校に10年、その後、中学校で15年英語を教えていました。市や県の教育委員会にも勤務しました。管理職としては、中、高で貴重な経験をさせていただき、最後は、小学校の校長として38年間の教員生活を終えました。

専門は英語です。初めての中学校では、小規模のため各教科担当が一人だけでした。何事も自分で判断できるのですが、初めての私には、相談する先輩が必要でした。当時は、福井県の全中高にALTが配置された頃で、つたない会話力ではありましたが、ALTとコミュニケーションしながら、よりよいTTのあり方を模索しました。ALTとの交流も始まり、生徒だけでなく私自身の国際化も進められました。次に、念願の大規模校に異動しました。待ちに待った教科会でしたが、逆に、複数の英語教員が同じベクトルで動くことの難しさを味わいました。英語の授業のあり方については、おのおのが前向きで互いに授業参観をするものの、時間という制限の中で、英語教員たちが理想とするコミュニケーションアプローチをどうやって進めるかの肝心なところについて具体的に実践していくことの困難さを経験しました。その間、自分が

授業づくりで体得したことは、語学教材の題材は、「今」と「自我関与」が不可欠ということでした。

行政では、小学校英語の必修化を迎える時期で、市の小学校教員の指導力を高めるための研修の設定や授業研究に携わりました。学校訪問をし、たくさんの授業参観ができたことは、自分にとっての宝です。それを現場の先生方に還元するべく、訪問先で助言を求められるたび「先生方が明日からさらにやる気が持てる言葉を…」と悩む日々でした。10年後、今度は、小学校英語の教科化を目指す時期に、県教委に行き、福井県の生徒の英語力と教員やALTの指導力向上のために奔走しました。

最後に赴任した小学校では、県の英語力向上事業の協力校として、教員の英語の指導力を高めるために校内研修の体制づくりや教員の啓発に努めました。教員の中には、英語が苦手だから英語専科の人が指導するべきという考えがあります。確かに、それも一理あります。しかし、私は、長年小学校の子どもたちに寄り添ってきた小学校の先生しか発想できない英語の授業づくりはこれからの小学校英語にとっては大切だと考えています。いろいろな意味で、中学校の教え方をそのまま小学校に持ってきてはいけません。

私は、学ぶことが好きです。決して努力家ではないのですが、新しいことを「学びたい」という気持ちが強く、教員になってからも研修を進んで受けてきま

した。自分は、忘れっぽい、不器用と思うと同時にその分人よりも学ばないといけないという不安があったのでしょ。毎年、研究所の研修計画の発行が楽しみで、専門教科、情報機器、学級づくり、専門外教科の研修を予定の許す限り受講しました。さらに、同僚から紹介された県外開催の講座に参加するため毎年東京まで足を運びました。その講座は、数日集中型で著名な教育者の話を聞くものでした。忍耐もいりましたが、実に参考になる内容でした。自然と教育の専門用語にも親しむことができました。それは、自分にとっては、転ばぬ先の杖のような感じでしたが、ある年齢に達した頃から、それまでに学んだことが、いろいろな場面で役立つことを実感しました。

38年間をふり返ってみると、新たなことに気づきます。自分は、文部科学省の指定校に赴任することが多かったです。新任当時は、「指定校に来てしまった。」という感じで、積極的でも、消極的でもない自分でした。市全体が文部省の道徳教育推進の指定を

受けていたので、研究授業といえ、いつでも道徳でした。でも、お陰で、研究発表時には、なぜか道徳を楽しんでいる自分がいました。次の中学校では、心身障害児理解推進の研究でした。中学生と養護学校の生徒が交流するもので、私自身にとっても未体験ゾーンでした。学級ではやんちゃで手を焼いていた男子生徒が、誰よりも養護学校の生徒さんと生き生きと交流する姿を見て自分の未熟さを知りました。総合的な学習の時間の研究指定校の小学校にも赴任しました。その経験は、次の中学校で、中学校最初の総合的な学習の時間の立ち上げに役立ちました。最後に、学力向上フロンティアスクール事業の研究発表です。学びに向かう力の育成担当となり、県内外からの参観者の集まる研究大会に向けて努力しました。若い頃、職員会議で意見を言う度に手が震えていた自分が、大規模校の校内研究会で先輩教員といっしょに講義をしている自分に気づいたとき、時の流れを感じました。

## インターンシップ／金曜カンファレンス報告

### 「守破離」の視点

授業実践・教職専門性開発コース 1年/福井大学附属義務教育学校後期課程 **三上 泰生**

物事を学ぶ姿勢として日本に受け継がれている「守破離」。守：師となる人の型を守る（真似る）、破：師の型を極めた後、他の型も学ぶ中で自分に合った型を生み出し、師の型を破る、離：師匠の型、自身が生み出した型や技についてよく理解しているため、型から離れる。

みなさんもこの有名な考え方を知っているのではないのでしょうか。私は2年前、学部3年時にこの言葉に出会いました。当時はまだ「師」と呼べる人に出会っていなかったため、その考え方もあまりしっく

りませんでした。しかし、教育実習、インターンシップでメンターとなってくださった数学の先生の授業は子どもたちの探究的な学びに価値付けをし、子どもベースで教えのサイクルを回すという、まさに私が目指す理想の授業を展開される先生と出会いました。私はこの先生を「師」と思い、「師」の授業を観察し、日々学んでいます。授業観察では、iPad Proを使用しています。観察によって見取った学びのメモというのは子どもの姿ありきでないと、語り合うことはできません。そのため、印象に残るシーンを時

には動画で撮り、それに対し、自身の見取りをまとめていくということを行っています。幸運なこととして、私は7年生（中学校1年生）、8年生（中学校2年生）の1クラスずつ担当教科である数学の授業を受け持っているため、「師」の授業観察によって得た学びを真似し、自身のクラスで授業をすることができます。つまり「守破離」の「守」の段階をこのインターンシップを通して実行することができています。

また授業観察で得た学びを語る場として金曜カンファレンスがあります。ここでは、それぞれの学校で得た学びを語り合い、聴き合うことで深め、自身の中に確実に吸収し合うことが実行されています。例えば、私は「師」の授業での発話と同じように発話したが、なぜ子どもの反応がそれぞれ違うのかについてよく語ります。子どもの反応がよい悪いではなく、それまでの授業における子どもの思考の流れを整理したり、その瞬間の反応を分析したりすることは授業研究そのものだと感じます。ただし、金曜カンファレンスは数学を専門とする人の集まりではありません。そのため、コンテンツベースの話し合いではなく、社会を担う子どもたちに必要な力がどう育成されるかというコンピテンシーベースの話し合いを心がけています。他者に語る、思考を外化することは、自分の得た学びを改めて整理することになり、よりいっそう学びとして実感することができています。

この「守破離」の視点を実感した私は学部時代を振り返ってみました。私が教育学部のカリキュラムを

体験して感じたことは、この「師」と出会うチャンスが少ない、つまり授業観察に行く回数が少なすぎるということです。ゼミによってはチャンスがあるものの、大半の学部生は附属義務教育学校での研究集会くらいしかありません。理論を学び、授業を作るという経験がじっくりできるカリキュラムも大切だとは思いますが、この「守」の段階に学部生で入れないことは教育の進歩が遅くなっている原因だと感じています。採用されてしまえば、校務分掌、何より日々の自分の授業に手一杯になり、「師」を見つけ、真似ることなど後回しになってしまいます。自己流の授業を展開することが悪いことだとは思いませんが、やはり「師」が30年で到達した段階へ自分たち若手にあたる教師が30年かかっているのは教育の進歩はありえません。

その点、教職大学院のインターンシップ制度は、2年間どっぷりとメンターや同じ教科の先生方の授業観察をすることができます。まずは「師」の発話や展開を観察し、その「師」の意図を省察し、実践の中で真似る、そこからスタートだと思います。ぜひ、メンターの先生方や今後若手を指導される先生方は、若手の教師の授業を見てご指導されることに加えて、ご自身の磨かれてきた授業を若手の先生方に観察させてください。この福井県の教育、広くは日本の教育が進歩していくために、熟達した教師から若手の教師へと学びを伝承し、「師」「弟子」という立場を超えて「共に」高め合っていきましょう。

## 点の学びから線の学びへ

授業実践・教職専門性開発コース1年/福井市安居中学校 川崎 太地

大学院での学びのスタイルは、自分たちで進めていく金曜カンファレンスやインターンシップなど初めてのものばかりで、ようやく慣れてきたところだ。とはいえ、新型コロナウイルスの影響で、未だほとんどの先輩方や同期の院生たちとはオンライン上でし

か顔を合わせたことがないまま、教職大学院に入学してからもう半年が経とうとしている。

福井市安居中学校でのインターンシップは、コロナ禍で学校が休業期間中だった5月半ばから始まった。去年教育実習を経験した際に、3週間という短い期間の中でも生徒との関係構築ができたという自負

があったことから、私は今年からのインターンシップにおいても生徒との関係構築にはそれほど時間はかからないだろうと考えていた。むしろ、今まで自分が見たことも経験したこともない全校一体型教科センター方式という校舎の作りや英語科としての授業づくりを学びたいと考えていた。しかし、始まってから夏休みまでの数ヶ月間、何よりも苦労したことは生徒との関係構築だった。保育園から中学校までほぼ同じメンバーで上がってきたため、生徒たちの中にコミュニティが出来上がっていたのである。金曜カンファレンスなどを通して、先生方や先輩方、同期の院生などから多くの意見をいただいていたが、ある先生に次のような事を言われた。「休み時間などの空いている時間での雑談を通して生徒との関係を築くことはできるけど、授業を通して生徒との関係を作っていくことはできると思うよ。」私は、授業と休み時間を別物のようにとらえていたため、最初にこれを聞いたときは、授業を通して生徒との関係を作るのは無理だと思っていたし、できても生徒とずっと向き合ってきた経験のある先生にしかできないだろうと考えていた。だが、8月の終わりからやらせていただいた授業に対して書いていただいた Learning Compass (教職員向けに出している校長通信)には、私のある発言に対して「このような発言は生徒と授業者の距離を縮め、(後略)」とあった。これを読んで、先述した「授業を通して生徒との関係を作ることもできる」が自分の中でつながったように感じた。具体的に感じたわけではないが、その授業が終わった後からの生徒の反応にも表れているのではないかと思う。例えば、インターンシップが始まってから専門教科である英語科の質問をされたことは一度もなかった。それが、「先生、ここがわからないんですけど…」のように少しずつ質問に来るようになってきたのだ。教員として信頼されるには、授業を通すのが一番なのだろうと感じる。

授業についてであるが、これまでに1、2年生で1時間ずつ、3年生で1単元(8時間)をいただいて授業を行った。特に、3年生での1単元の授業は教育実習を含めても初めての1単元授業であり、自分にと

って学びがとても大きかった。授業の度に空いている先生方が見に来てくださることが多く、授業を振り返る際に、最も言われたことは、「単元の目標は何か」ということであった。頭の中では、単元構成を考える際に単元のゴールを定めてそこに向かって授業を作ることは当たり前だと認識していた。だが、実際には曖昧にしか考えておらず、自分の中に具体的な目標がなかったことに気が付いた。単元全体の見通しが甘かったのである。単元のゴールを具体的にイメージできていないために、単元のゴールに達するための1時間のゴールも繋げて考えられておらず、1時間1時間が別個のものになってしまっていた。このように1単元を通して授業をしてみると、今までに学んできたことが繋がってくる。例えば、教育実習中には、「授業の際にはその時間の目標を生徒に示してあげると良いよ。」と指導を受けた。この時の指導を素直に受け取り、インターンシップでの1、2年生の授業の際にも授業のめあてを示してきた。しかし、1単元を通して授業をする中で、1時間の授業の目標を示すことに対する私の考える意義は少し違うものではないかを感じるようになった。単元の具体的なゴールまで見通して指導計画を立てることができていれば、1時間の授業で示すべきゴールも必然的に見えてきたのではないだろうか。授業の際に1時間の目標を生徒に示すというのは、その1時間が単元全体の中でどういう意味を持つのかを生徒と共有するということなのだと現時点では捉えている。

生徒との関係づくりや授業づくりといった一部分だけでも、点で学んできたことがインターンシップを通して線で繋がっていくことが実感できている。今、私がインターンシップや金曜カンファレンス、その他のカンファレンスで学んでいることは点での学びに過ぎないかもしれない。しかし、今後線の学びにきつと繋がっていくものであろう。今後のインターンシップやカンファレンスを通して、いつかの線の学びのために、より多くの点の学びをし、自分の教員としての土台としていきたい。

## ミドルリーダー／マネジメントコースだより

### 大学院1/4が終了する中で ～Society5.0の時代に～

ミドルリーダー養成コース1年/燕市立分水中学校 牛腸 つぐ実

今年の4月に入学して、早くも6ヶ月が過ぎようとしています。つまり大学院生活の1/4が終了したことになります。身についたものは何かあるのだろうか。大学院の学びについては全体像がつかめず、目先の課題に取り組むことだけで精一杯でした。自分が今、どのポジションで何をやっているのか。果たして院生としてこれで本当に良いのか、暗中模索の状態が過ぎて行ったように思えます。ですが振り返ってみると、4月のガイダンス・カンファレンス準備会に始まり8月のCycle3まで、とても楽しい時間を過ごさせていただいたと思っています。また、入学前までは自分自身の中で考えもつかなかった、ICT機器を利用してのオンライン授業。まだ少し先だと思っていた「Society5.0の時代」がやってきたことを実感させられた6ヶ月でした。

私は昨年度の異動で燕市立分水中学校に着任いたしました。新しい土地・新しい分掌・初めて出会う教職員の中での休校要請。子ども達とも出会えない中での転勤は不安が大きかったです。また、新潟県では、福井大学大学院連合教職開発科の認識度はまだまだで、孤独感が否めない状況でした。その中で、大学院の授業は心の支えになっていました。苦手意識の強かったICT機器が、私たち院生を結びつけてくれました。大学院に提出する書類や各種登録から始まり、細かな確認や連絡をし合う私たちをICTが繋いでくれました。Zoomを使用してのオンライン授業などは、私たちに新しい生活様式を提示してくれました。オンサイト・オンラインに関わらず、自分の意見を述べることで、今まで自分の中で整理されていなかった

ことが形になり、自分の考えや思いを再認識させられた機会となりました。6月の「Fukui Round Table 2020」では、Virtual Summer Sessionの利を生かして、「Zone E 探究」に生徒2名と一緒に参加させていただきました。多くの先生方の情熱が感じられる熱い ZoneE に、たどたどしくも私と生徒で試行錯誤しながら当日を迎えました。探究と呼ぶにはかなり稚拙な内容でしたが、準備会を経て経験を積んで参加した分水中学校。あの大きなVirtualの世界の一員として仲間に入れていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。この感謝の気持ちを今後の私たちの努力で恩返ししたいと思うのでした。

そんな大学院生活の中で、私が一番印象に残っているのは7月のカンファレンスでした。その日は朝から楽しみでした。合格してから初めて院生と対面できる日だったからです。会場は福井大学と連携している板橋区教育委員会の一画で行われました。緊張よりも喜びが勝っていました。Zoomでお会いしていたので初対面ではありませんでしたが、実際にお会いした姿は、思ったよりも背が高い方、思ったよりも話しやすく人懐こい笑顔の方、パソコン越しで受けた印象とは違うものでした。また差し入れをいただいたり名刺交換をしたりと、対面式ならではの出来事に、私は始まる前から気持ちが高揚していました。授業が終わってからは、大塚にある東京サテライトのオフィスに案内していただきました。展望コミュニティ・ラウンジの空間は本当に居心地がよく、東京サテライトの皆さんがZoom授業をしている様子が目に浮かぶようでした。その後のCycle1～2での

「実践記録や専門書」を読んでまとめるという作業は、ある意味、学生っぽい自分に出会えた気がしました。3日間の3Cycleの授業。オンサイトなら夕食時に院生と語り合い、討論会となる夜を過ごせたのかも知れません。過去を羨ましく思う気持ちもありました。ですがオンラインの良さもあり、日々のリズムを崩さずに過ごせたトータル9日間は大きく、身体的な負担や金銭的な負担も少なかったです。私の仕事場では在宅勤務が無かったので、ようやく新しい生活様式に参入できた気持ちでした。

これからの社会は、教育はどう変革していくのだろうか。また我が国が抱える、人口減少と社会構造の

変化で、学校で学ぶべき知識や要求される内容が変わり、児童生徒も速いスピードで大きく変容しています。今後は多種多様な生き方に柔軟に対応できる許容力を身に付けた児童生徒を育てることが課題となってくるのではないのでしょうか。最近、世界の動向が私たちの生活に直結してきているような感覚を覚えます。教育の抜本に向き合える機会として、大学院での学習を深めて行きたいものです。そして学んだことを自分の職場で実践し、今後の協働に生かして行きたいと考えています。

## 半年を振り返って

### ミドルリーダー養成コース1年/福井大学教育学部附属幼稚園 岡山 佳耶

ミドルリーダー養成コースに入学して早くも半年が経ちました。この半年を振り返ると、教職大学院は私にとって学びを深めてくれる場所であり、新たな疑問を投げ掛けてくれる存在であるように感じています。

4月5月は勤務している幼稚園が休園となり、オンラインでの発信や教材研究に取り組む日々でした。そのような中、園内研究会では「幼稚園での学び・育ち」について問われることがありました。オンラインでの繋がりになったからこそ見えてくる、実際の関りでしか経験できないことは何なのかを考えます。すなわち、幼稚園で過ごす意義について問われているようにも感じました。しかし、この時の私は納得できる答えが見つからず、「幼稚園で過ごす意味って何だろう？」と迷い悩む日々が始まりました。

ちょうどその頃、初回のカンファレンスに参加します。未熟者の自分がついていけるのかと不安に感じていましたが、実際にふたを開けると、私と同じようにコロナ渦に休校となり、「学校で学ぶ意義」について考え、悩んでいた教員がたくさんいたことが分かり、同士の存在に会えてホッとしたのを覚えています。明確な答えが出ないなりにそれぞれが考える、学校で学ぶ意義やこれまでの実践を伝え合

う中で、私なりに「幼稚園で過ごす意味」を考え直すことができました。そして、参加者に対して思いを語っている自分がいることにも気づきます。この出来事は私に自信をつけてくれました。

これでようやく晴れやかに実践と向き合えると思ったのもつかの間、ある参加者から「幼児教育はなぜ科目ごとに行われないのか？環境を通して行う意味は何か？」というような問を投げかけられ、上手く答えられない場面がありました。また迷い、悩む日々が始まります。今度は先ほどとは反対に、自分の実践の中でその答えを探ろうとします。

この半年間はこのようなことの繰り返しでした。実践に疑問を感じたり、苦しくなったりした時にちょうどカンファレンスや集中講座が開かれ、私の気持ちを救ってくれる人や言葉、考え方に会います。しかし、また新たな疑問にも出会い、今度は実践の中に宿題のように入り込んでくるのです。実はこの相互関係が、私の実践を高めていく為のモチベーションになっているのだと感じており、とても心地が良いです。これからも、そんな私の心を支える存在であり続けてほしいと願っています。

この半年間と教職大学院の存在について振り返ってきました。ミドルリーダー養成コースに所属して

いるにも関わらず、自分のことで精一杯というのが正直なところで、本来ならばここでの学びを広げていく役割があると思うのですが、ほぼ実行できてい

ません。そこで今年度の後半の目標は、学びを広げるというところにも意識を置くと定め、このミドルリーダーだよりの締めにしたいと思います。

## 学校改革マネジメントコース1年/福井市越廼中学校 向井 敏幸

コロナ禍の中で、各学校は様々な対応に追われています。本校においても計画したことが流動的に変化し、会議を経て新たに決定したことも変更を余儀なくされています。このような状況の中、「話し合ったことが無駄になってしまった」「時間をかけたにもかかわらず生かせなかった」など教員のモチベーションの低下が見られます。また、出張や校外での会議なども減り、学校外の先生方とのつながりが希薄になったり、刺激を得る機会が減ったりしたことで、創造的な提案も生まれにくくなってきています。

「望ましい未来の姿」「輝く未来に向かって進んでいく」「あるべき理想」

私たち教員はこうした肯定的なイメージをエネルギーにしながら、次に向かって省察し、新たな実践に向かっていきます。言い換えると新たな実践が生まれるのは、未来に対して肯定的なイメージがあるからであるといえます。「今、していることが何かの役に立つ」、「よりよい未来につながる」、そう感じるからこそ、私たちは前に進もうとするのではないのでしょうか。しかし、先が見通せないコロナ禍の現在の状況において、肯定的なエネルギーを生み出すのは難しいと思います。冒頭にもあるように、何事も対処的になってしまい、日々を過ごすことで精一杯になり、自分を振り返ることも少なくなっています。次へのエネルギーを生み出すことができない中で、肯定的な未来が訪れると心から信じて教育活動を進めることは困難です。

教職大学院についても同様です。本年度は、オンライン上での他者とのつながりが中心であり、オンライン上での関わりはオンサイトに比べ制約も多く、

「何のために大学院に入学したのか」「入学したにもかかわらず十分に学ぶことができていない」などと考えてしまうことも多かったです。コロナ禍の中ではやむを得ないとは解りつつも、現在のような学びの形態が自分の未来に繋がっていく実感がなかったからです。人は「何のためにやっているのか?」という問いに答えられなくなったとき、迷いやもろさが生じます。私自身も今年に入ってから学びの意味を見失っていました。

しかし、淵本幸嗣先生が有志者を集めて開くマネジメントゼミでこうした考えが変わった。マネジメントゼミでは、学校経営や危機管理について、自分自身の過去の経験や現任校の実態を振り返りながら小論文を書きます。その小論文は、一つのケースとして全体で共有され、多様な視点から新たな可能性を見つけ出したり、解釈し直したりすることで多様に意味づけがなされます。他者に意味づけされることで、これまでの経験が今の自分につながっていることを実感することができました。このような対話を通して、私は、「もし・・・していなかったら、今の自分はどうなっていたのだろうか」と考えるようになりました。

このような視点で、「もし、コロナ禍において、教職大学院で学んでいなかったならば・・・」と考えてみると、おそらく、コロナ対策に追われながら、それを理由に漫然と日々を過ごしていたと思います。また、外部との関わりを絶たれ、自分だけの思考に陥り、次への展望も見いだせず、現状維持すらできなかったかもしれません。

コロナ禍、そして不確実な未来が待ち受ける今後、未来の自分が「もし、・・・していたならば」と後悔しないよう、そして、自分自身が関わる多くの人が

「今」の経験に価値を見出すことができるような環境づくりを目指せるようさらに学びを深めていきたいと思います。

## 『つながりがつくる未来』

学校改革マネジメントコース1年/福井県立福井東特別支援学校 柳本 寿美子

「特別支援学校だけでなく、いろいろな校種の先生と話をしたい」と思い、福井県教育研究所主催のマネジメント研修を受講して以来、今年で3年経とうとしています。長期実践報告書を書き進めながら、これまでの教員生活を振り返っていると、いろいろな出来事やエピソードが思い出されてきました。そして教職大学院生としては1年目ですが、なんだか3年くらい通っていたようなそんな充実感でいっぱいです。今年度はコロナ禍により直接対面できる機会は現時点ではありませんが、全国の先生方とZoomを通してつながることもできています。25年前の大学生だった頃の私には想像もつかなかったことです。不思議なもので、これだけZoomで話していると、直接会っているようなそんな感覚にもなってきました。

私はこんなことを言われたことがあります。「せっかくの大学院なのに、コロナで残念だね」と。私はそのとき自信を持って答えました。「でも、このような状況だから全国の多くの先生方がコロナ禍の中でもできることは何か、という共通した目標をもって、取り組んでおられる。それは校種を超えてお互い励まし合い、また共に考えているように思うので、私は逆にラッキーだった」と。確かに「対面しながらセッションができた」とか「終わってからまた話を聞いてみたい」とそんなことはありました。でも、対面で話せないからこそ、カンファレンスが終わってからメールでやりとりを続け、直接会っている以上に深い話ができていることも事実です。確かなコミュニティが生まれているのも実感しています。

今年度は、月間カンファレンスや集中講座の他に、学校改革マネジメントコースのゼミに参加させてもらいました。出された課題について、レポートを書きそれをみんなで読み合い、お互いの学校のことやこ

れからの学校づくりのことなどいろいろな面から話し合いました。つい先日、全9回が終わってしまいました。先生方が提出したレポートや大学院の先生方から毎回いただいたメールは、印刷すると実にファイル2冊分にもなりました。学校で課題に直面し同僚に話したいと思ったり、管理職に提案しようと思ったりしたとき、このファイルが私にとってとても大きな手引書となっていたことは間違いありません。

先日、本屋で「人生とは速度ではなく方向である」という、ゲーテの言葉に出会いました。これまでの教員生活を紐解いてみるとこんなキーワードが思い浮かびました。「きっかけ」「種をまく」「発信」「つなぐ」「結びつき」、つまり現在に至るまでにはいろいろな出会いがあり、そこで種をまいたり発信したりしながら、つながり合ってきたこと、そしてこれからもいろいろな出会いとともに道はつながり続け、ゴールすらも変えていけるということです。学校改革やチーム学校について互いに傾聴し、語り合いながらつくる学校は、とても楽しいだろうと確信しています。速度は遅くとも、ゆっくりゆっくり楽しみながら、目指すべき方向に向かっていければいいと思います。

合同カンファレンスでの出会いを機に、附属義務教育学校後期課程8年生と今年度交流をするチャンスに恵まれました。しかし、コロナ禍により、いろいろなことが制約され、対面型の交流もできない状況下にありました。それでもなんとか遠隔システムを利用しながら、すでに4回もの交流が実現できました。義務教育学校生徒が本校生徒のことを「知りたい」「彼らの幸せのために自分たちには何ができるか」と一生懸命考えてくれました。本校教員と義務教育学校生徒が一緒になって授業を考える、そんな新しい取組が始まりました。多様性を認め合う時代の中

で、本校の子どもたちが卒業後、地域で豊かに暮らしていけるために、同世代の子どもたちとのつながりはとても明るく頼もしいものです。

学校内にいるだけは、こうした「出会い」にも「種をまく」チャンスにも恵まれなかったかもしれません。今は小さな渦を起し始めたところですが、いずれ大きな渦となり校種間を超えて子どもたちが共に学び合い、認め合えるそんな未来を私は描いています。

す。ただし、自分だけが頑張り、「きっかけ」作りだけに留まってもいけません。大きな渦を力強く起こすために、大学院やゼミで出会えた先生方とコミュニティを作っていたように、学校や地域でもこのような仲間を増やしていきたいと思います。コロナ禍が教育界に起こしたのは負だけではありません。コロナ禍だから見えた新しいコミュニティづくりをこれから形あるものにしていきたいです。

## 「語ることは「考えること」

学校改革マネジメントコース2年/勝山市立村岡小学校 北川 喜樹

毎月の合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加すると、語り合いの時間が長いことに驚く。今はその意味に気付いた上に、さらに慣れも手伝ってもう驚かないが、最初の頃は「2時間語りっぱなしなんてあり得ない！」と感じたものだ。

実際、その価値に気付けないと、「こんな長いホントに必要なの？」という残念な感想だけで終わってしまうと思う。実際に以前、福大教職大学院へ入学された先生が「いったいいつになったら教えてもらえるのですか？」と不安を口にしたという話を聞いたことがある。

ここ教職大学院では「人と語り合う」という行為に学びの軸足を置いている。私たちが考えていることは、声に出して語ることで、はじめて明確な形をとる。ただ頭の中で考えているだけでは、ぼんやりしたままで、その輪郭さえも曖昧なことが多い。たとえ声に出しても、独り言ならばそれもあまり意味がない。

重要なのは、「他者に対して語る」ことだと、教職大学院で改めて気づくことができた。言葉にして他者に語りかけるとき、私たちは相手に伝わるように、自分の考えを言葉で表そうとする。それは、相手に分かる言葉、通じる言葉を探し、最適なものを選び、口に出すということだ。その過程ではじめて、頭の中で考えていたことは相手のみならず、自分にとっても明確になる。皆さんも、「うまく言葉にできないんだけど…」と前置きして語り出した経験があたり

う。その後、語りながら適切な言葉が見つかり、考えが整頓され、クリアになっていく体験を、きっとどこかでされたはずだ。自己内対話は、実は自分ひとりの環境では起きない。対話する他者がいてはじめて生じるものなのだと思う。

また、語ることは当然聴くこととセットであるため、他者の語りを傾聴することから得られる学びも大きい。しかも、自分の考えていたことに相手からのフィードバックが入ることで、新しい気づきや価値が生まれることもよくある話だ。

さて、「学校改革マネジメントコース」で学ぶ私にとって最大の関心事は、「いかにして学び続ける教師集団を形成・維持していけるか」ということだ。先生方に「語り合う」環境や習慣が整った学校であれば、「考え合う」ことが先生方に根付くだろうから、学び続ける状況が維持できる（かもしれない）。単純に、話をよく聴いてお互いを尊重することで先生方の雰囲気は良くなり、協力的で、働き甲斐のある幸せな職場が実現できる（かもしれない）。そうすると授業改革が進み、子供たちの学力が向上し、さらに探究的で楽しい授業が実践でき、先生も子供たちも、保護者の皆さんも教育委員会も文部科学省もハッピーになれる（かもしれない）。

少なくとも私は、先生方が幸せに働けるような学校を実現したい。それは管理職としての責務だ。教職

大学院での学びは、その私の願いを支えてくれている。まだまだ道半ばではありますが、がんばります！

## 「大学での学びを学校現場で生かせる喜び」

学校改革マネジメントコース2年/福井市森田中学校 青木 喜一郎

教職大学院に入学し2年目を迎えました。夏期・冬期集中講座をはじめ、毎月の合同カンファレンス、ラウンドテーブル等、多くの学びの場に参加できていることをうれしく思っています。止まることのない学びの流れの中に身を置いていることで、充実した日々を送ることができています。

8月の夏期集中講座で自分は『学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦』と『プロセス・コンサルテーション 援助関係を築くこと』を読みました。2冊ともに、自分にとって今後の柱になる本となりました。そして、ここで学んだ理論や実践を自分の学校の実態に合わせてやってみたいという思いがわき起こりました。これは、教職大学院での日々の学びの中で「実践の大切さ」を教わっているからこそだと思います。

まず、『学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦』には、次の記述がありました。「大人側の話し合いは生徒にもオープンにしてあるので職員への教育活動と生徒への教育活動の間にはっきりとした境目はない。」

このことと、コロナ禍での学校祭を関連させて「応援規定」を生徒と教師とともに作り上げることはできないかと考え、新たな会議「応援規定会議」を設けました。各色応援団長4名が案を作成し、会議の場で教師の前で提案・説明、そして教師はそれに対して様々な質問や意見を言う。生徒はそれに対応できるようにしっかり事前準備をする。さらに会議の結果を生徒全体に広めていくという一連の流れです。

ここで自分が狙ったのは、生徒が「主体的に関わろうとする態度」ではなく、もう一段上の「自分たちの

活動であると自覚をもって動く態度」を育成することでした。生徒に権利を与えるかわりに、「責任の質と範囲」を広げてもらうということです。校長先生からは、生徒の自治的な力が加わるように生徒会役員を「応援規定会議」に参加させると良いという御指導をいただきました。実際の会議では、応援団長の提案に生徒会役員が再考を促すという生徒同士の意見の掛け合いも生まれました。堂々と意見を述べる生徒の姿を見て頼もしさを感じました。教師が理論や実践を学び、意図的・計画的に生徒に仕掛けていくことで、充実した教育活動が実現するということを体験できました。

また、本校は学校評価において夢をもっている生徒の割合が少ないという現状がありました。そこで、夢をもつ生徒を育成するために、独自に「夢に向かってシート」を作成し、定期的に生徒に自己省察させています。直近では、学校祭準備期間中の自分の物事の捉え方の変容について書かせ、そこに保護者のコメントを書いてもらいました。正直なところ、生徒も教師も忙しい時に申し訳ないという思いもありましたが、結果は各担任の先生からも大変好評でした。省察を繰り返すことで生徒の自己省察力を高めていき、夢を実現できる条件を備えた人間になれるよう成長してほしいと願っているところです。

そして、この活動についても教職大学院で PDCA サイクルの重要性を学ぶことができたからこそと感謝しています。

## 夏期集中講座を振り返って

### 夏の集中講座に参加して

授業研究・教職専門性開発コース 1年/福井市中藤小学校 岩城 つばさ

福井大学教職大学院に入学して初めての集中講座に参加しました。4週間の間に3 cycle を行うというまさに「集中」した日程でしたが、私にとっては、参加した全ての cycle での時間が、豊かな実践に浸り、確かな理論を学び、そして自分自身の実践を見つめなおすための大変有意義な時間となりました。ここでは、各 cycle において私が考えたことを中心に述べさせていただきますと思います。

はじめに、cycle 1 では、伊那小学校「学ぶ力を育てる」という実践記録を読みながら、子どもの学びについて、グループの先生と意見の交換を繰り返しながら、私自身の考えを深めていきました。私が伊那小学校の実践記録を読んだ感想を一言で表すと、「圧倒された」に尽きます。その実践のスケールの大きさと豊かな実践をともしする子どもと教師の姿に圧倒されました。伊那小学校の実践では、授業の型や、構想に固執しない実践のあり方が印象的でした。実践の中で、子どもの興味や関心が広がり、発展していくにつれて学びは教師の構想の範疇を優に超えていく。その学びの広がりにより教師が寄り添い、時には困難にぶつかりながらもその困難さに一緒になって立ち向かうことによって、実践を通して子ども、そして教師自身も成長していることを強く感じました。私が参加したグループの間では、そういった子どもとの学びの姿を、「学びの種を植えて、出てきた芽を育てる」と表現しましたが、最後の話し合いの中で出てきた、この言葉がまさに、3日間伊那小学校の実践に浸りながら考えてきたことの集約であるような気がして、言葉がスッと落ちてきました。cycle 1 での時間は実践を読むだけに終わることなく、グループで自らの体験や思いを語りながら、子どもの学びについての考えを深めることが出来たことに大きな意味があったと感じています。

次に、cycle 2 では、教育、コミュニティについての理論書を読み、グループでの語り合いの中で、各自の気づきを確認し合いました。私自身は、エティエンヌ・ウェンガー他が書いた「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、実践コミュニティの理論について考えました。実践コミュニティについて学び、自らが関わっている学校現場と照らし合わせて考える中で、日本の学校現場のコミュニティの多くが、どこか保守的で柔軟性に欠けており、今までの慣習から抜け出すことが出来ていないのではないかと感じた気づきが生まれてきました。そのような状態から、学校の組織として考えるならば、子ども中心に据えて様々な立場の大人が繋がり探求的な学習を進めることができるような実践コミュニティにしていくためにどういったことが必要なのか。そのことを考えると、「コミュニティ・オブ・プラクティス」にあったような、コミュニティの発達段階を捉えながら生き物のようなコミュニティと向き合っていく長期的マネジメントの視点を持つことと、子どもの学びを支えるために一番必要なことは何かといったコミュニティの中での、目的意識の共有が求められるのではないかと考えたことを考えました。私は、cycle 2 の3日間は、これまであまり深く考えることが出来なかったコミュニティの理論について、同じグループの先生に助けを頂きながらも、一から学び直すことができ、収穫のある、充実した時間だったと感じています。

最後に、cycle 3 ではグループで自らの実践について報告書を見せ合い、語り合うことで、自分自身の実践に向き合うための時間となりました。私は、インターンシップ先の特別支援学級の中での子どもとの関わりと課題を中心として前期の報告書をまとめました。じっくりと時間をかけながら報告書としてまと

め、それを他者に語る活動を通して、これまでは「点」であった、記録やその中で当時の自分が考えていたことが繋がり、一つの「線」のようなものになっていくことを感じました。これまで曖昧だった、子どもとの関わり方への私自身の姿勢が「線」を描くことによって見えてきたと思っています。その一方で、子どもの現状を克服していくための実践が行えたかという、自信を持ってそう答えることができない自分がいたことにも気がつきました。そのことを反省点として、これからは、現状を捉えるだけに終わることな

く、克服していくための手立てや実践についても積極的に取り組んでいかなければならないと感じました。

私にとって初めての集中講座は、オンラインでの講座となりましたが、画面を通して伝わってくるみなさんの熱い想いに触れることができた、本当に贅沢な時間であったと思っています。私自身も自分の実践を自信を持って語れるよう集中講座で学んだことを生かしながら、今関わっている子どもたちと学び合いたいと思っています。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学附属義務教育学校後期課程 鈴木 克学

今回は、私にとって初めての夏の集中講座となった。大学院入学後半年が経ち、この半年の実践を振り返るための良い機会となった。夏の集中講座を通して考えたことを記していく。

Cycle 1 では、伊那小学校の実践記録である「学ぶ力を育てる」を読み、子どもたちの成長・コミュニティの形成・コミュニケーションの発展などを検討した。「学習とはどういうことか」「学習の芽をどうとらえるか」「学習をどう展開していくか」「学習をどう評価していくか」「子どもを生かす教師」など、そもそも「学習」とは何なのかについて考えさせられた。展開していくための仕組み、教師の子どもたちへ対する見方、考え方、教師の役割など、もっとこれらについて考えていかなければならないと思った。実践記録を読み進めていく中で、今後自分に活かしていきたいと思ったことがある。それは、子どもとともに授業を創り出す事や、授業参観を大切にしていくことである。子どもの特性を活かしながら授業していくことが大切であるということに改めて感じた。授業参観の仕方に関しても、子どもを特定して、追跡し記録することや、子どもは、何をめあてにして、どのような活動を行っているのかを見とることが大切である。また、今後は、子どもたちの活動だけではなく、教師がどのような「きっかけ」を子どもたちに作って

いるかという部分も見えていかなければならないと思った。

Cycle 2 では、「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、コミュニケーションの展開の基盤となる実践コミュニティについて考えた。どのような発展を遂げてコミュニティが作り上げられているのかを見ていった。コミュニティの初期段階で重要となってくる課題が、メンバー間に十分な共通点を見出していくことである。また、コミュニティにとって最も大事な目的を定めていくことも大切なのである。コミュニティの目的が異なれば、必然的に構造や活動も変わってくる。メンバー全員が1つの目的に焦点をあて、その目的を達成させようと取り組んでいくことで、コミュニティはまとまっていくのではない。

また、発展段階の中で、メンバー間の結びつきや、信頼関係を気づき、共通の関心や、認識を高めていかなければならない。この「信頼」というキーワードは一体感のあるコミュニティをつくっていくためには、欠けてはならないものであると思う。このことは、自分の経験から共感することもできる。このコミュニティを部活動に例えてみる。やはり「信頼関係」が成り立っていないチームは、勝つことが難しかった。しかし、「信頼関係」がしっかりと成り立っていた時のチームは、たとえ誰かがミスをしたりしても、全員で、

励まし合いながら、良い方向へと立ち直っていったという経験がある。また、生徒同士だけではなく、教師と生徒の信頼関係も非常に重要であると思う。教師への信頼がない場合、部活動や学級経営はうまくいかないのではないかと考える。信頼関係があることで、生徒たちは自分の思いを教師に素直に伝えることができ、これが、気楽で、落ち着く居場所をつくり、良いコミュニティをつくることにつながっていくのではないと思う。いかに「信頼関係」が大切なことであるのかを改めて感じる事ができた。

Cycle3 では、自分自身の実践を振り返った。自分の前期のインターンシップを振り返った。実習生ではなく、インターン生という立場で、どのように行動していくべきなのかを考えさせられる半年間であったと振り返る。学校現場では、学習指導、生徒指導、学級経営などをはじめ多くのことを約半年で学ぶことができた。まず、授業に関しては、実践ではなく、主に授業参観をした。教師は、授業を通して、生徒た

ちに何を考え学んでほしいのか、単元を通してどのように成長してほしいのかという意図をしっかりとって授業構成していかなければいけないということに気付かされた。また、授業参観の際には、全体の生徒を見るのも一つの方法ではあるが、こどもを特定して、追跡し記録することで、生徒がどのように学習を通して成長していくのかを見とることができることが分かった。

生徒指導に関しては、叱り方や叱るタイミングの難しさを感じた。感情的に叱るのではなく、子どもたちが将来、社会人として生きていくために必要なことを教えていかなければいけないということ学んだ。

初めての夏の集中講座では、様々な資料を通して、今の自分の実践と結びつけながら、じっくりとこの半年を振り返ることができた。その中で、今後の課題を多く見つけることができた。その課題を克服し、さらに視野を広げ様々なことに挑戦していきたい。

## ミドルリーダー養成コース1年/カリタス幼稚園 西川 くるみ

コロナ禍での夏季集中講座 Cycle1、Cycle2 は ZOOM で行われ、東京から福井に赴くことはありませんでした。入試のために福井という地に初めて訪れて、緊張しつつも美味しい海の幸を堪能し、これから始まる大学院生活に期待を膨らませていたことを思い出します。その後生活は一変し、どのように学校を再開していくか模索する中で大学院の皆さんと ZOOM で繋がり、同じ苦しみの中で前に進み続ける仲間がいることがどんなに励みになったことかと思えます。そして、半日かけて福井には行かなくても今確かに福井大学の大学院生なのだと思うことができます。

Cycle1 では「福井発プロジェクト型学習」をわくわくしながら楽しく読ませていただき、探究学習が生涯にわたって学び続ける子どもを育てていくのだと感銘を受けました。ZOOM でお会いした福井大学附属義務教育学校の先生方のお顔が浮かび、その先生方と子どもたちが活動している姿を思い浮かべながら読むと、書籍の中の素晴らしい実践が“絵に描い

た餅”ではなく、ぐっと身近に感じられ、自分の実践に照らして考えることができました。特に違う年齢の事例を読むことで、年齢なりの探究の在り方を学び、さらに小さな子どもたちと接する私なりに、どのように探究心を満たし、更なる問いが持てるよう働きかけていくか、早く夏休みが明けて子どもたちに会いたい気持ちでいっぱいになりました。

Cycle2 では「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、本園がコロナ禍で同僚性を発揮することができ、風通し良く機能するコミュニティとなっていることを実感し、嬉しく思いました。カリタス学園からはこちらの教職大学院に各校種から通わせていただいております。私も幼稚園からこちらに通う3人目です。足掛け5年にわたって進んだ草の根からの改革の道筋が紐解かれていきました。コミュニティのリズムを大切にしながら、みんなが受け入れられる挑戦を少しずつ重ねてきたのだと思いました。さて、私は2人の先輩方とどんな挑戦をしていこうか、期待で胸がいっぱいになりました。

Cycle3 はいよいよ自分自身のことを振り返り、文章にしていかななくてはなりません。自分が何を感じてきて、どうなっていきたいのか、言語化したいけれどもいざ実践を振り返ってみると、それは遠い昔のことに感じられ、失われた日常の中でなかなか思い描くことができませんでした。そんな中で助けになったのは東京サテライトキャンパスで共に3期を受講した仲間です。お互いに真剣に向き合っている姿を感じたり、話したり聴いたりすることで思考が少し整理され、次のアクションへのきっかけをつかむことができました。お一人で向き合われた多くの先生方も、お疲れ様でした。また皆さんで集中講座がもてる日が来るといいですね。

さて、私が実際にどう振り返ったかという、気が付いたらいつの間にか風通しの良い職場のコミュニティになっていたといっても、具体的にどのような変革があったのか詳しく見てみると、自分自身も周辺メンバーなりに一生懸命関わってきたことや、ますます保育が楽しくなってきた、子どもたちともっとワクワクしたいと思う自分に気付かされました。

2学期、これまで通りには進まない日常の中で、あらためて同僚、子ども、保護者、色々な温度差に気付かされます。みんなの大事にしたいことを確かめ合いながら、Cycle1で学んだ子どもたちのように、納得できる着地点を見つけ、よいコミュニティとして結ばれるよう、希望をもって困難を乗り越えていこうと思いました。

## 夏期集中講座を終えて

学校改革マネジメントコース1年/静岡県立駿河総合高等学校 遠藤 健

夏季集中講座は奈良女子大学で行い、書籍を読みその著者と対話するように学びを進めた。学びを進める中で、幼児教育や場の持つ力について興味が湧き、鮫島先生の御提案で附属幼稚園に伺うことができた。そして、空間デザインや授業デザインについて気づきと学びを得ることができた。附属幼稚園の松田先生のお計らいで、園児の登園を実際に体験させていただいた。そこには一見何の変哲もない園の姿があり、入り口から園庭が広がり、暑い日差しを遮る木々が気持ちよく迎えてくれた。歩き進めていくうちにあることに気がついた。靴箱に着くまでにさまざまな仕掛けがなされ、園児の好奇心をくすぐる草花や施設が、園児が通るであろう場所に配置されていた。安全安心でいながら、園児の冒険心や興味関心を掻き立てるような仕掛けだ。年齢に合わせ、静と動が自然発生するような仕掛けがなされていたのである。教室に入ると更に細部まで配慮された空間デザインがそこにあった。年齢、季節、遊びと学び、習慣や協働等に考慮された教室づくりがなされていた。

ふとその光景を目にしたとき、サッカーの練習設計と類似しているなと感じた。私は、教師になって20年間、高校のサッカー部の顧問をしてきた。公式戦に向けた計画の組み立て、練習メニューのデザインは20年前と大きく変化した。何かを押しつけ一辺倒の技術や戦術を身に付けさせるのではなく、自ら気づき技術や考え方を生徒自身が獲得してくような練習メニューになってきている。そうでなければ実際の試合で自ら考え判断し動くことは難しい。何しろ生徒はスポーツ本来の楽しみを感じることができない。生徒主体なのである。そのためには、自ら気づくような空間デザインの仕掛けがいくつも必要になってくる。例えば、同じゲーム形式のトレーニングでもコート大きさや人数、時間によって起きる現象が変わる。デザイン次第で身体にかかる負荷のかかり具合や判断のスピード、獲得する技術などが変わってくる。そして、瞬時にデザインを変化させ成果の最適化を図るように練習を組み立てることも必要になってくる。私は、高校商業の教師をしているが授業デザインもサッカーの思考を取り入れていることがある。

商業の授業に限らず、総合的な探究の時間ではとくにサッカーで学んだ空間デザインが生徒の成長を図れる手段になっていると感じる。なぜなら、生徒に主体を置き学びのプロセスを大切にしながら社会で必要な資質・能力を身に付けさせるという目的が同じだからだ。

幼稚園では、奈良市立一条高校の出羽先生の事例発表も聞くことができた。今年度から1年生で探究プログラムをコロナ禍で始める時に考えた授業デザインについてのお話だったが、ここでも共通する部分があった。子ども主体で楽しみながら学びを進めていく授業デザインだった。「楽しみながら」という

ことは「興味関心を持ちながら」ということに置き換えられる。

書籍を読み幼稚園を訪れたことで、空間や授業をデザインするときには、目的と手段を明確にしながら学校だけでなく地域の大人とチームで進めていく重要性を、あらためてこの夏の集中講座で学んだ。計算された授業設計は学びの質を高める。この学びを今後の研究と日常の実践に生かし、今まで感覚で捉えていた部分を言語化し、理論として捉えていきたい。御協力いただいた皆様、計画を立てていただいた鮫島先生、ありがとうございました。

## 大学院での学び、それこそが私の財産

学校改革マネジメントコース1年/若狭町立上中中学校 中村 達治

昨年度、県のマネジメント研修や教職大学院での事前履修を終え、いよいよ本年度、正式な大学院生としての学びがスタートした。7月、8月の夏季集中講座を終え、改めてこの福井大学連合教職大学院で学ぶ魅力を再確認することができた。今回はそのことについて述べたいと思う。

まず何より、学校現場での実践や働き方そのものが大学院での学びにつながり、また大学院での学びが、学校現場での実践や働き方に活きるということである。私は今、上中中学校1年生63名の学年主任をしているが、日々の授業に加え、学年の運営や生徒理解面での業務に忙殺されることもしばしばである。そんな中であって、学年を運営しよりよい学校をつくるために自分がどのような実践を行ったのか、そして学校全体としてどんな動きがあったのか、生徒はどう変容したのか、などの大切なことを自らの実践記録として残していくことは、とても意義深いことだと感じている。このような機会がなければ、わざわざ記録に残そうとも思わないし、じっくりと省察をすることもなかったと思う。また、自らの実践について大学院の先生からはもちろん、他校の先生方から助言いただいたことで、新たなアイデアを思いつ

いたり、自分の考えに確信が持てたりするなど、幅広い考え方を身につけることができた。これは私にとって大きな財産である。

夏季集中講座では、斎藤喜博先生『学校づくりの記』を読み解き、自らの教育実践に生かそうと考えを深めることができた。『学校づくりの記』は、学校と地域社会との関係、職場の人間関係、職員をやる気にさせる仕掛けなど、学校があるべき姿、トップリーダーのあるべき姿を示唆している。これを読んで私が特に考えたのは、以下の事である。

**風通しの良い職員室、学年部会にしていく**

斎藤先生は、職員の意識改革に取り組んだ。「子どもが悪い」という考え方、職員同士をののしり合う雰囲気改善である。私は、職員間には年齢差、先輩後輩の関係があるが、その礼儀は大切にしつつ、どんなことでも気兼ねなく言える雰囲気づくりに努めていきたい。学習指導、生徒指導、行事指導等、あらゆる指導場面について、生徒の頑張った点、良い点を取り上げ、学年集団のみならず、学年をまたいで称賛することで、心地よい雰囲気をつくる。誰もが児童生徒を好きであり、その良さをたたえ合うことで、職員を認め合うことにつなげていく。また、自分たちの実践に

ついて小集団で議論し、省察することを、日常の当たり前の風景としていく。ただし、問題点に気付く鋭さも持ち合わせ、常により良い職場環境づくりに努めていく。学年経営をしていくうえで大切なのは、職員間で情報の共有がスムーズに行われていること、どんなことでも気兼ねなく言い合える関係であることだと思う。いいことも悪いことも、迅速に情報が共有され、「担任の先生のつぶやきから学級の様子がわかる」、そんな部会でありたいと思う。

#### ビジョンを共有し、生徒や職員の活性化につなげる

齋藤先生は、学校での職員間のあり方について、次のような信念を持っていた。「共通の課題、共通の目標をきちんと持った人たちが、それぞれの個性的な仕事を認め合い、励まし合いながらつながった時、一人ひとりの力や仕事は小さくとも、集団としての仕事ができる。仲間の仕事の良さを発見し、その仲間のやってくれたことが、自分たちの共通の課題目標に向かっており、自分たちに影響し利益を与え、自分た

ちを守ってくれるものだと認識することが、仲間のした仕事への尊敬、感謝となる」この考えは、職員だけでなく生徒にもあてはまると思う。今年度1年生では、総合的な学習の時間「ふるさと教育」を通し、仲間と協働し創造的な活動を行っている。

「若狭町を自分たちの手で盛り上げる」というゴールの下、小グループで社会に貢献する活動を行う。生徒一人ひとりに役割を与え、個性を大事にし、十分に発揮させることで、意欲をもって学習活動に取り組みせていきたい。共通の課題、共通の目標をきちんと持たせるとともに、それぞれの個性的な仕事を認め合い、励まし合いながらつながることで、集団としてやりとげた達成感をもたせたい。

教職大学院での学びは、1年履修の私にとって今年度で終わるものである。しかし、事前履修を含め2年間で学んだ多くのことは、波瀾万丈な私の人生にさらに大きな足跡を残してくれるものと確信している。

## 夏サイクルを踏まえ、自分の実践に関する一考察

### 授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校前期課程 井上 尚紀

新型コロナウイルスの感染拡大のため、本年度の夏集中サイクルはZoomを用いたオンライン形式でおこなわれた。休校政策により夏休みの時期も変わったことから、日程も変更されての開催であった。

サイクル1〈実践記録の検討〉では「福井大学附属義務脅威学校・秋田喜代美(2018)『福井発プロジェクト型学習』」の文献を検討した。現在インターンシップをさせていただいている附属義務教育学校前期課程では、「社会創生プロジェクト」(社創)という取り組みが行われている。「社創」を通して児童は何を得ているのか、意義は何か、どのように今後進んでいくのか、児童の学びを支える際の新しい視点を獲得することができた。特に大きかったのが失敗の大切さである。「文化祭に向けて作成した「テレビ」は、何か自分たちが目指していたものとは違う。視聴者のことをもっと考えなければと、二年目は「視聴者ファ

ースト」のテレビ制作に取り組む」と、文献内の生徒は反省点や、想定していたものとは違うという失敗経験から学びを切り開いていっていた。このことをサイクル1内のグループで共有した。あるこども園の園長先生をされている伊藤先生は、園の子どもたちの学びを考え、あえて失敗させることがあるとのこと。失敗することによってそれが原動力となって次の学習へとつながっていく。また、その失敗は納得のいく失敗である必要があり、事前に想定していたことと違うなというところが大事。と、実体験を踏まえた、失敗を通して学んでいくことのできる可能性を知ることができた。

ここで、私は昨年度のインターンシップで実践させていただいた理科の授業を思いだした。「5年生流れる水の働き」の単元にて、川の角度が急になると流れる水の速さも急になることを確かめるための実験

方法を児童自身で考え、実験を行った。しかし、条件制御の観点から実験を行うことのできる児童は少なく、土で作った山から水を流してみるだけの実験となってしまった。実験後、実験が自分たちの思うようにいったのか聞くと、児童は口をそろえて「うまくいった」と言うのだが、授業者だった私はどうして児童がそう答えたのかわからなかった。授業後、指導教官

の先生からアドバイスをいただき、次の授業では川の角度以外の条件はできるだけ厳密にそろえて実験しようという条件制御の観点を踏まえて再実験を行った。条件制御の観点から実験を行っていなかった児童にとっては、納得のいく失敗ではなかったのだと思う。

## 夏の集中講座を終えて

学校改革マネジメントコース 2年/福井県特別支援教育センター 大石橋 義治

教職大学院 2年目の夏の集中講座は、遠隔会議システムを使って行われた。新型コロナウイルス感染予防対策の影響で、最近では遠隔システムを使った会議や研修に参加する機会が増え、その雰囲気にならずに慣れ始めてはいたが、3日間、3サイクルの集中講座はなかなかハードで、これまでに味わったことのない疲労感があった。しかし、今回の集中講座では素晴らしい本に出会ったことは大きな収穫となった。ここからはサイクル2で読み進めた、E.H シャインの『プロセス・コンサルテーション—援助関係を築くこと—』について少し述べたいと思う。

私が勤務している福井県特別支援教育センターでは、平成 23 年度から「学校支援」を重点目標の 1 つに掲げている。学校支援とは「支援を要する子どもを担当や学級だけで支えることが難しいとき、学校を俯瞰的に見る立場の特別支援教育コーディネーターや管理職が中心となって、校内外の支援につなぐため、校内支援体制を整えたりして、組織的に子どもや担任を支えることができるように、学校が特別支援教育体制を整備することにセンターが協力する」ということである。しかし、学校支援をどのように進めていくのかについては試行錯誤の状態が続いている。そこで、今回『プロセス・コンサルテーション—援助関係を築くこと—』を読み解くことで、センターと学校との関係性の構築に必要なことは何かについて探っていきたいと考えた。プロセス・コンサルテーションは、10 の原則と、コンサルタントとクライアント

の関係性の仮定に基づいて進められる。その原則や仮定の中に、学校支援を進める上で重要なヒントを見つけることができた。そのいくつかを以下に述べたいと思う。

<仮定>「クライアント（学校）は、何がうまくいっていないのか分かっていないことが多い。診断するのに援助を必要としている」

学校支援のスタートは、センターと学校とで課題を共有することである。そのためにこれまでセンターでは、「学校組織への働き方チェック表」を用いて、管理職や特別支援教育コーディネーターから聴き取りを行い、学校の課題を明らかにし、共有を図ってきた。「気がかりな子どもが多い」「特別支援教育コーディネーターがうまく役割を果たせていない」「子どもについて情報を共有する時間の確保が難しい」など管理職や特別支援教育コーディネーターは、学校の課題としてセンターに伝え、情報提供やアドバイスを求めるが、学校としてその課題をどのように分析し、改善に向けた方針を考えているのかについては、これまであまり聴き取ることがなく、共有もできていなかったように思う。プロセス・コンサルテーションの視点から、学校が自身の課題を明確で具体的な課題として捉えることができるように援助していくことも学校支援に含まれていると考えなければならぬと気づいた。

<仮定>「自分の頭の中のフィルターに気づく」

センターは特別支援教育に関する専門的な知識や情報を持って、学校や担任、保護者等とかかわっている。しかし、その知識や情報が固定観念や先入観、偏見などにつながることが多い。教育相談においても、申請書に書かれた文言から対応策を頭に浮かべたり、決めつけたりすることがある。また、学校支援においても、「この場合は、〇〇の研修をしましょう」などとこれまでの自分の経験から簡単に提案してしまう場合がある。そうなると、学校はそれ以上の情報を求めたり、受けつけたりしなくなってしまう。これは、誤認や不適切な判断等につながりかねない危険なことである。個人や組織にかかわる場合、自分の頭の中

にあるフィルター（自分の特性）を知っておくことが重要であることに気づかされた。

集中講座サイクル2では、学校支援がうまく機能しない要因をプロセス・コンサルテーションの原則や仮定から考えることができた。そこから見えてきたことは、センターは学校についてもっと知る必要があるということである。そのためには、お互いが対等な立場になり、安心して学校のことを話してもらうことが大切である。このプロセスを通して学校は、自身の課題を把握し、その改善方法を自分たちで考え、実行に移すようになっていくのだと思った。

## 夏期集中講座からの学び

学校改革マネジメントコース2年/福井市明倫中学校 前田 朋子

夏期集中講座で「小さな学校」「学習する組織」を読み、グループセッションで先生方と話し、これまでの自分について振り返る機会になった。「学習する組織」では「真のビジョンにするにはメンバーの共通ビジョンにならなければならない。そのためには対話が必要である。」と述べられている。4月に初めて学年主任となり、年度初めに学年経営案を提示したが、共通ビジョンではなかった。「こんな生徒を目指していきたい。」と私が話す一方通行であった。目指す生徒像を学年スタッフと話し合うことが必要であった。Cycle3のグループセッションで、そのことを話題にしてみると、同じグループの先生から

「目の前にあることで、スタッフと目指す姿を共有することで、最終的に目指す姿の実現に近づくのではないのでは。」

とアドバイスをいただいた。目の前にあることは何か・・・と考えてみると、夏休み明けに行われる学校祭に向けて、学年の先生と「どんな姿を目指すのか。」を話し合うことだと思った。学年の学校祭担当の先生に「どんな姿を目指すのか、話し合いたいのだけども・・・。」と相談すると、「ぜひやりましょう。」という返事であった。学年会では、私からではなく、

担当の先生から提案してもらい、どんな姿を目指すのか考えてもらった。学年スタッフの思いは、「仲間・全力・笑顔」が共通であることが確認できた。学年集会では、そのことを生徒達に話すこともできた。学校祭が終わった後は、担当の先生から「学校祭を通して、生徒のよかったところや頑張ったところ、そして今後の課題は何か」について、話題にしてもらった。それもやはり、共通していることが確認できた。今後は、具体的にどんな取組をするのか考えていきたい。

またある日、学年通信の仕事が、担当の先生にとって負担がどうしても大きいので、調整しなければと思っていた。どうしたらよいだろうかと職員室で話す、

「私は今、指導主事訪問の提案授業でいっぱいだけど、終わったら、お手伝いしますよ。」

「パソコン関係は苦手だけど、しますよ。」

「副担の先生より、担任の方が、原稿の催促はしやすいので、担任の私がしますよ。」

という声が、学年の先生から返ってきた。自分自身も困っていることを話し、相談することで、学年の中で協働性が生まれるのだとも思った。

教職大学院も半年間になった。教職大学院での先生方との対話などを通して、いろいろなことを学んでいきたい。

## ラウンドテーブル Zone Sessions を振り返って

### Zone A 学校

## 今こそ、教師こそが、思考を止めない！

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス小学校 海東 直希

Zone A では、堀川小学校の政二先生、伊那小学校の宮川先生、札幌大通高校の西野先生が登壇されました。学校ごとに状況は異なるため三者三様でありながらも、見えてきたことは「できることをやる」先生方と「学びを止めない」子どもたちの姿でした。学校の状況と目の前の子どもたちの実情に合わせて、試行錯誤しながら実践を重ねられています。

例えば、堀川小学校では、伝統的に行っている朝の活動を、これまでと異なる方法で作れるよう子どもたちに働きかけたり、伊那小学校では、チャボの誕生を Zoom で中継して子どもたちと繋がったり。逆に、自主的に水やりに来てくれる子のことを紹介する場面もありました。子どもを見つめ、悩みながらも置かれた状況の中で最大限に工夫を凝らし、省察的实践を繰り返す先生方の姿がありました。不測の事態で、変わるものと変わらないものがあります。変わるものは実践の方法。変わらないものは、実践の目的、「子どもを見つめる」ことであり、教育の根っこにある色褪せることのない価値を再認識できたように思います。

—教師が思考停止になっていないか—

この言葉は、参加者の皆さんの脳裏に焼き付いた言葉の一つです。札幌ラウンドテーブルを立ち上げ、

「大人自身が挑戦する姿勢」を大切にし、体現される西野先生から発される言葉には、説得力がありました。自立・自律した人を育てたいという西野先生は、様々な大人の価値観に触れられる「本物の体験」を仕組み、大人と共に考える場の創造、友達同士励まし合う場の創造をされています。状況が変われど、学校は「自他共に高め合っていく場所」で在りたいとお話しされていました。このような状況だけれど、いえ、このような状況だからこそ、大人こそが思考を止めずに学び続けるべきだと、西野先生のお話から皆さんが感じ取ったことだと思います。

子どもたちは、学びを求めています。仲間も求めています。初めての事態、不測の事態で、我々教師にできることは何でしょうか。これまで、教育界は、変わらない・変われない体質があったのかもしれませんが。学校の価値を見直さねばならない今こそ、子どもを改めて見つめなおし、教師自身が思考を、学びを、変革を止めない姿勢こそが、学校の新たな価値を創っていくのだと思います。大学院にいるからこそ、より深い学びができることに感謝をし、まずは2020年度を力強く歩みたいと思います。

## 教育は自動販売機ではない

上海外国語大学付属外国語学校 山口 聡

今回の Covid-19 に伴う休校、さまざまな行事の中止は学校に、そして生徒たちに何をもたらすのだろうか。それは「今まで通り」をどう取り戻すか、ではない。クラスメイトとの別れもなく卒業した生徒、新学年をリモートで迎えた生徒、保護者の生活が一変した生徒。人によっては人生の転機になるようなこの事態からどのように進んでいくのだろうか。Zone A では、まさにこうした問題に現在進行形で携わる先生方の強い挑戦がテーマだった。

代表で話された三名の先生方の実践からは児童生徒が発揮した「力」と、それを引き出す先生方の情熱がオンラインを通じて私たちにも伝わり、その後のセッションも非常に盛り上がった。その中で「教育とは？」という話題が挙がったが、本稿の場を借りて私の考えを述べるなら「教育は自動販売機ではない」と

いうことだ。生徒は何かを学べば決まった成果があるわけでも、教員は何かを教えたら決まった理解を得られるわけでもない。だから、そこでは「先生、〇〇なんて勉強して意味があるんですか？」という問いは成立しないし、今まさに新しい時代を迎えようとしている児童生徒たちに、我々教員の知らない新しい世界を生きる力のためだとしか言うしかない。

福井ラウンドテーブルはそうした先生方の工夫と苦労、直面する問題と垣間見える展望を示していた。まさか Web 会議でラウンドテーブルを行うとは…これも数か月前には予想もしていなかったことで、この短期間でそうした場と機会をデザインした「新しい世界」のためのラウンドテーブルは大きな刺激になった。この場をお借りして御礼申し上げ、結びとさせていただきます。

横浜市立青葉台中学校 黒津 彰紀

まずは素敵な会に参加させていただき、ありがとうございました。コロナによる休校で各々が大変な状況にあると思いますが、コロナだからこそ全国の先生方と出会えたと思っています。今回の Zone はコロナによる休校で、この休校期間中をどう捉えるのか、そしてこれからどう活かしていくのかを考えていく良い機会になりました。これから第二波第三波と続くかもしれない中で、私たちがどう児童生徒と向き合っていくべきなのか、不測の事態にも自発的に活動できるようになるにはどうすればいいのかをみんなと話す機会をもてたことがよかったです。話し合っていく中で話題の一つにあがったのが、関

係作りでした。私たち人間は人との関係によって生かされている、その関係は教育ではどのようにかわっていくのか。そして、子どもたちの主体性を尊重しながらも、その子が感じ考えている内面を見つめ続けていくことが大切である、という話はその後、私が学校と言う場がどういう場所なのかを考えるきっかけを与えてくれました。具体的にすぐに何かをできるわけではないかもしれませんが、ここでの話を参考に、生徒とも仲間の教員とも話し合いながら一緒に学び合う場、共に活動できる場を創っていきようにしたいです。

# 仕方がない

信州大学教育学部附属松本小学校 田代 佑夏

仕方がない。今日の自分のやる事すら決められず、悶々とした思いを抱えつつ、人と話すことすら制限されていたあの頃。何度「仕方がない」と思ったか知れない。子どもが来られないのだから仕方がない。日本全国、世界各地でこうなのだから仕方がない。どうせ今やっても変わってしまうのだから仕方がない。外に出られないのだから仕方がない…と。その一方で、何かやれることがあるのではないかと、それは何か、どうすればいいのかと考えることは止められず、その答えが見つからないことでまた悶々としていた。自分の中でもがくしかなく、もがきの末やってみたことを評価するのも自分しかいない。自分の弱さ、小ささ、無力さに気づかされた。

ようやく子どもたちと再会できるようになった頃、今回の福井ラウンドの案内をいただいた。正直、もうコロナのことからは逃げ出したい、コロナの話題にならないことに参加したいと思った。それは、あの頃の苦しさや混乱を遠ざけたい思いと同時に、自分ができ得なかった何かを知ることで自分の無力さを認識してしまう怖さがあったのであろうと、今は思う。こわごわ参加したオンラインミーティングの画面に

は、本来であれば会うことすらかなわない全国各地50名以上の参加者が映っていた。語られることは、既に報道されているような周知のことであるのだけれども、そう語られるようになっている過程での苦しさが分かるからこそ惹き込まれ、同調し、いつの間にか自分も語り出していた。あの時のもがきは、決して無駄なものではない。仕方がなかったからこそ、これまで当たり前すぎて考えてこなかったことを考え、自分の限界を知り、自分の限界の中でもできることを探そうとした。目に見える結果にはあられていないかもしれないが、そうした過程を経験できたことこそが自分にとって大きな成果ではないのか。いつの間にかそう思えるようになっていた。

全国各地を物理的に移動し、語り合うことは当面、制限されるであろう。仕方がない。しかし、だからこそ生み出された今回のオンライン福井ラウンドのような形であれば、教師の学習コミュニティは間違いなくつながり、広がり、もしかしたらこれまで以上に濃密になっていくように感じる。様々な可能性を模索し動き出す勇気をもらい、私も一歩を踏み出していきたい。

## コロナ時代と対峙する教員を元気に

福井大学教育学部附属義務教育学校 北 典子

実践研究福井ラウンドテーブルには、実践発表も含めて8回参加し、明日からの授業改善に活かせる視点が明確になったり、学び続ける教師をめざす気概をもらったりと充実感を味わった。その反面、自身の実践や職場の現状とかけ離れた発表に接し、「自校ではできそうにない！」と痛感する自分が情けなくなり、グループセッションが負の方向に陥る経験もした。

今年4月に連合教職開発研究科のスタッフに加わり、「Zone A 学校」の企画に携わる機会を得た。企

画段階から当日のセッション終了まで、スタッフと参加者の二つの立場から振り返ってみたい。

想定外のコロナ状況下での臨時休業。学校はコロナ対応を迫られ、教員は子供達と対面できない葛藤を抱えながら、子供達とつながるための取組を日々模索している状況が続いた。スタッフは、“コロナ対応を通じて”をキーワードに、様々な思いを抱いて参加される方の思いに応えるべく有意義な時間の共有をめざし、「Zone A 学校」の方向性を共通理解し合った。

・今後も続くウィズコロナ社会における学校の意義や学びのあり方を探り、学び合う教師のコミュニティをデザインする方向性を提起したい。

・シンポジストの発表を受け、参加者が多くの方と意見交換できる場を創出したい。等

上記の議論を重ね、数分間のペアトーク、メンバーを組み替えての2回のグループセッションと盛りだくさんの構成に落ち着いた。オンライン接続や時間配分に支障が生じないか、短時間のグループセッションで議論が深まるか危惧しながら、一丸となって準備を進めた。

当日、伝統ある研究実践校に勤務される3人のシンポジストは、コロナ下で変化してきたことや新たに増えてきたこと、大事にしていきたいことを語った。私は、子供の願いや学びを求める姿を大切にす

学習活動の質を高めようと、コロナ状況下でも停滞せずに協働研究を進めている教師としての熱量に圧倒された。子供達が、仲間の存在意味を確認してつながり合って学び合う場、多様な他者と関わり対話を通して主体性や志向性を伸長する学びの場。そうした学校の役割と教育の本質は普遍であると再確認した。教員と子どもたちが協働して探究的な学びを創り上げる活動は、学校でしかできない。「未来への学びを拓く学校づくり」に取り組む元気をもらった。

最後に、「Zone A 学校」の企画は成功したと捉えている。知見を得ることが多いシンポジウムだったからこそ、それを受けて充実したグループセッションが展開された。スタッフの細やかな心配りと粘り強いマネジメント力を実感し、改めてこのチームに参加できたことに感謝している。

## Zone B1 教師教育

### コロナ禍の今こそ働き方改革と学び合う学校づくりを

学校改革マネジメントコース2年/美浜町立美浜東小学校 三宅 育代

ラウンドテーブルへの参加も3回目となりました。今年度、教職大学院では、コロナウイルス感染症対策のため、すべてのカンファレンスがZoomで行われています。その流れで、ラウンドテーブルもZoomで行うという初の試みでした。今までの当たり前が通用しないまさに改革の年となりました。あらゆる学校で、環境が大きく変化し、どのように学ぶのか試行錯誤が繰り返されています。私は、この大学院で「授業力向上と働き方改革」というテーマを掲げ、一見相反したテーマについて考えていきたいと思っていました。そんな折、前回のラウンドテーブルから、「教師教育 働き方改革と学び合う学校づくり」というZone ができました。まさに、私が学びたかった、そして職場で実践したかったテーマであります。今、世界中がコロナ禍の中でかつて経験したことのない大変な状況に陥っています。しかしこんな時だからこ

そ、新たな発想で知恵を出し合い、教育方法や働き方、教師の役割について考え、改革していくチャンスなのかもしれません。

ラウンドテーブルでの話題はコロナ禍の中で、各学校がどのような対応をしているかということが大半でした。1日目、グループセッションがうまくいかなくなるというハプニングがありましたが、グループでなく、参加者全員で振り返りとして交流ができたことは、かえって実りある時間となりました。この交流によって、日本中の先生方、いや海外の日本人学校の先生にも、各学校の様子をお聞きすることができました。また、学生さんの意見も聞くことができました。休校になるとすぐにオンライン授業を始めた学校。各家庭のネット環境をいち早く調べ、機器の貸し出しをして全員がネット上で学べる環境を作った学校。教員で研修し、ユーチューブで授業を発信した

学校。Zoom で毎朝、朝の会を開いた学校。コロナウイルスの感染拡大の状況も地域によって様々でしたが、各学校の様子も本当に様々で、各学校が教職員みんなアイデアを出し合って乗り切っていたことがよく分かりました。Zoom のトラブルというピンチがチャンスとなって、Zone B1 の参加者みんなで学び合うことができた1日となりました。

報道でも私の身の周りでも、「自治体における具体的な方策が示されない、上から方針をきちんと出してほしい。」という意見が聞かれました。実際、私も

「国や県、市町のような上の機関の方がきちんとした方針を出してくれないと学校側はどうしたらよいか分からない。」と悩んだこともありましたが、しかし、地域によってコロナの感染状況は大きく違います。このラウンドテーブルに参加して、自分のいる場所が今どのような現状にあるのかを把握し、保護者の方の気持ちも察しながら、子どもたちにとって最も良い方法は何か、各学校で考え、実行していかねばならないと感じました。

## 働き方改革と学びあう学校づくり

福井県立丸岡高等学校 島田 芳秀

私の勤務校（福井県立丸岡高等学校）では、「福井大学連合教職大学院と連携した教員の指導力向上」が学校経営方針にあり、この3年間で2名の院生が学んでいる。また、本校生徒の探究活動の発表の場が、福井ラウンドテーブルの生徒ポスターセッションである。今回は、校長、教諭、生徒が各 Zone に分かれて参加させていただいた。

Zone B1 では、コロナ禍の困難な状況下での人材育成と働き方改革との両立を目指した実践が、オンライン会議システム（Zoom）にて報告された。オンライン会議によるラウンドテーブルは初めての試みであり、ネットワーク回線等でのトラブルもあったが、回線がつながった喜びを参加者全員で共有でき、一体感のあるゾーンセッションとなった。

セッションでは、福井県の教育の動向に関しての話題提供（福井県教育庁 清川学校教育監）の後、「コロナ休校中の学習・生活に関するアンケートの結果」（岐阜聖徳学園大学附属中学校長 宮島先生）、「働き方改革と学びあう学校づくり～With コロナの経験を活かす」（福井大学連合教職大学院教授 牧田先生）、「コロナ禍での学びの保障と働き方改革」（丸岡高等学校 島田）の3つの実践報告が行われた。

宮島先生のアンケート分析からは、コロナ休校中の問題点があぶりだされ、参加者の学校の事例も紹

介されるなど活発な意見交換がなされた。牧田先生の大学での Zoom 活用では、働き方改革への有効性や諸課題が報告され、さらに Zoom 活用に向けた方向性も示唆していただき、今後に向けて貴重な意見交換ができた。

私（島田）からは、コロナ禍での働き方改革として次の4つの事例、①仕事のアウトソーシング（PTA、教育総合研究所、企業を巻き込む）、②外部人材の活用（退職教員、市職員、大学生や大学教員）、③教員のやる気を育てる（学校現場を県のスタンダードにする）、④仕事にルール（授業動画作成で独自のルール）を説明し、これらの“働きやすさ”と“働きがい”を学校経営の柱にしていることを報告した。報告に対して参加者から多くのご質問やご意見をいただいた。これからの学校経営に活かしていきたいと思う。

福井県内の小中高校では、6月から学校が再開された。臨時休業中に、教員集団が苦労して作り上げた授業動画作成のノウハウや働き方改革の取り組み等が、学校再開後に活かされているだろうか。授業は、これまでのオールスタイルに戻っていないだろうか。コロナ禍は、まだ始まりに過ぎない。第2波、第3波にむけて、コロナ禍での働き方改革と学びあう学校づくりを緊張感をもって進めていくことが必要であると、セッションに参加して考えさせられた。

## 前を向いて走るために

深圳日本人学校(原籍校:奈良県生駒市立光明中学校) 篠原 嶺

2018年4月に中国の深圳日本人学校へ赴任した。夢に見た在外教育施設での勤務であった。授業は中学生全学年の国語・保健体育と小学生の書写、校務分掌では進路指導主任を任された。初めて担当する仕事に胸が躍った。しかし、3ヵ月ほど経つと苛立ちが募り、半年後には倦怠感が生じてきた。まるで自分の意思とは無関係にゴールの見えないマラソンを走らされているような気分であった。「新たな職場への適応、見通しの甘さから山積する業務」からくる心労だと自分自身に言い聞かせていた。

ある日、何気なくパソコンのデータを整理していると、福井大学ラウンドテーブルで発表したレジュメを見つけた。その瞬間、点と点が線で結ばれたような感覚が走った。私が抱える苛立ちや倦怠感は、福井大学ラウンドテーブルなどの研究会に参加できないことから生じているのではないか。「自分の意思とは無関係にゴールの見えないマラソンを走らされている」ような感覚は日本でもあった。しかし、日本ではその軌跡に目をやり、今まで走ったことの意味や意義を見出す時間があった。そして、職場が異なる「同僚」との対話を通して、新たな学習活動の着想を得られる場があった。そのおかげで、再び前を向いて走り出すことができた。私にとっての福井大学ラウンドテーブルの意義が明らかになった瞬間だった。

コロナ禍によりラウンドテーブルがオンラインで実施されると知った。今年度は研修部主任を任されたので、Zone B1 教師教育に参加した。岐阜聖徳学園大学附属中学校の宮島康広校長先生、福井県立丸岡高等学校の島田芳秀校長先生のお話が興味深かった。コロナ禍における学習保障をどのようにするのか、まさに「じりつ」(自律・自立)的に考えておられる校長先生だった。コロナ禍において、やらないという選択は簡単で楽である。しかし、コロナ禍においても、どのように配慮や工夫をすればできるのかを考えることは難しく労力を要する。これに、教職員や地域の方と協働で取り組まれていた。コロナ禍における学校教育の在り方を教職員や地域で協働探究されていた。このような協働探究の場を研修というのではないだろうか。担当があればやこれやと題材を用意するのではなく、教職員それぞれが自分自身の学びたいことや学校として学ばなければならないことを用意する。それを教職員全員で協働探究する。

福井大学ラウンドテーブルを経て、私は再び前を向いて走られるようになった。単に走るのではなく、周りを見ながら、共に走っている同僚や息を切らしている同僚を探しながら走っている。「じりつ」した教師になれるようお願いしながら。

## 働き方改革と学び合う学校づくり

～「With コロナ」の経験を活かす～

福井大学連合教職大学院 牧田 菊子

働き方改革の中、教師が協働で、世代間の交流と学び合いを進めていくことが求められています。Zone B1 では、これまで、多忙化の防止という切り口で働

き方改革の議論を進めてきました。今回の Zone B1 も「コロナ禍で直接会って意見を交流させることには制約がある厳しい状況の中で、Zoom 等のオンライ

ンを使いながら教師の協働性をどのように図っていくのか、その可能性を発信したい」という意図で企画しました。

そんな中、コロナ禍にあっての本大学院の取組を私が報告することになりました。これまで、特に振り返ることもなく、次々とやってくる新しい状況への対応に追われてただ動いていた私にとって、この機会は、コロナ禍での様々な試行錯誤を本大学院のメンバーがどのように協働で進めてきたのか、点を線として繋いで見直すことで、その取組に対して新たな価値を発見し、今後の展望を拓く貴重なものとなりました。

また、話題提供や他の実践報告、そして、図らずもグループではなく参加者全員でのセッションとなったことで県内はもとより県や国境を越えてお聞きできた参加者の皆さんの声からは、それぞれの場所で「子どもを思い、今何が重要なのかを探り続ける」探究学習に今まさに取り組んでいる教師の熱い姿が見え、離れていても繋がっている連帯感を嬉しく思うと共に、元気をいただきましたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。以下は、私の報告内容です。

本大学院は、今年度から、募集人員の増加や東京サテライトの開設、1年履修の開始により、学び合うコミュニティが大きく広がりました。そのスタートの時にコロナに見舞われ、互いの実践を語り合い傾聴し合う本大学院での密なる学びが全て否定される状

況に陥り、教職大学院「存続の危機」でした。そんな中、柳澤研究科長からオンライン（Zoom）を使って例年通りカンファレンスを行うことが提案されたのです。東京サテライト開設にあたり、分散型コミュニティとしてこのオンライン構想が研究科長の中にはあり、コロナ禍でその構想をスタッフで共有し、一気に実現の運びとなりました。準備を、ベテランと若手、以前からのスタッフと新しいスタッフが協働して進めたことは互恵的な学び合いに繋がり、Zoom活用により時間的な余裕が生まれ働き方改革にもなりました。そして、例年とほぼ同じ内容で、Zoomによるカンファレンスやラウンドテーブル等が実現したのです。オンラインを通して皆が繋がり、「一緒に行ったことで皆が学び合える」「自分だけで処理していくのではなく、共にやっていくことで距離を縮め、互いのことが理解できる」これらは働き方改革に有効な視点だと思いました。このことは、福井県立丸岡高校の島田校長先生から「働きやすさは、一人で抱え込まず、頼る力を身につけることで生まれる」とお聞きしたことにも繋がっていて、とても印象深く私の心に残っています。今後は、学校拠点で「対面」の良さを活かしながら、コロナ禍で経験した「オンライン」も取り入れ、「記録に残す」というハイブリッドで、互いの距離を縮め学び合う働き方改革を推進し、次への展望を皆で拓いていきたいと思っています。

## Zone B2 教員養成

### 非対面状況になって考えられるようになった 対人援助専門職養成の本質

福井大学連合教職大学院 遠藤 貴広

新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミック状況の中、大学の授業も従来のやり方では実施できなくなっている。教員、看護師、保育士、心理職等の

対人援助専門職の養成は、実習を始めとした対面での学習の割合が特に高かったため、対面での授業が

できない状況は深刻な問題になっている。これは私も他人事ではなく、連日様々な対応に追われている。

それでも、同僚たちと本学の教員養成カリキュラムで大切にしてきたことを再確認しながら、この状況・制約の中で実施できることを実施できることから始め、これまでになかった新たな発想・方法での取り組みも次々と生まれており、図らずも思わぬ実践の発展が起こっている。

今回のラウンドテーブルでは、現在のコロナ禍において、たとえ対面での授業ができないオンライン状況であっても、対人援助の専門職養成を担う大学が保障しなければならない教育とは何なのか、また、それをどのように行うのか、そして、遠隔授業というこれまでになかった状況から、図らずもどのような新たな教育実践の可能性が見いだされつつあるのかに注目し、このような状況だからこそ鮮明になる専門職養成の本質を、多様な参加者と探ることに挑んだ。

前半のシンポジウムでは、学校教員養成以上に深刻な状況にある看護師養成と保育士養成の実践現場から、大川洋子先生(福井県立大学 看護福祉学部 看護学科長 教授)と増田翼先生(仁愛女子短期大学 幼児教育学科 准教授)に話題提供をいただき、その視点から、教員養成を含めた専門職養成の本質について議論を図った。両報告とも、本学にはない問題解決・対応事例にあふれ、それぞれの現場の違いを知る機会になったのと同時に、それぞれの分野で対面での実習でないと保障できないものは何なのかを改めて考えさせられるものにもなった。

後半のグループセッションでは、教員養成、看護師養成、保育士養成を担う大学教員に加えて、実習生を預かる学校現場の教員、そして、養成の現場で多くの

困難を抱える当事者である学生が交ざった小グループで議論を行った後、最後に領域別のセッションも試みた。

議論は多岐にわたったが、全体を通して最も印象的だったのが、「この状況になる前は、専門職養成の本質として何を大切にされていたのですか？」という他大学院生からの質問。これには多くの参加者が思わず絶句してしまった。パンデミック状況でなくても考えていなくてはいけないことを考えていなかったことが、この状況の中で明るみになってしまったからである。半ば分かっていたことではあったが、あのように直接的に問われると、考えざるを得ず、知的に良い冷や汗をかいた。

セッション後の参加者からのコメントを読ませていただくと、本学の学生たちも苦しい状況の中、できるところで様々な挑戦をしており、それに刺激を受けたという他大学の参加者が多くいたことも分かり、学生たちがまた頼もしく見えてきた。

今回はすべてZoomを使ったオンラインで全セッションを実施した。これだけ大規模で複雑なものをやることは普段なく、本ラウンドテーブルでは初めての試みであったため、終始不安は尽きなかったが、実際やってみると、本Zoneに関しては驚くほどトラブルがなくて驚いた。一緒に新しいものを生み出していこうという協力的な雰囲気が学外の参加者からも強く感じられ、とてもありがたかった。

本当に大変な状況の中、話題提供のご準備をいただいた大川先生と増田先生、どのような展開になるか見通しが不確かだったにもかかわらず議論に協力くださった参加者の皆様に、改めて感謝申し上げます。

## グループセッションに参加して

岐阜聖徳学園大学 阿部 慶賀

筆者は前年度からすでに一般参加者としてラウンドテーブルには参加していたものの、本格的にスタ

ッフという立場で参加するのは初のことであった。さらにテレカンファレンス化という大幅な変化も加

わり、二重の意味でこれまでの経験との差異を実感できる機会となった。

筆者は Zone B2 でのグループディスカッションのファシリテータを担当したが、その際のグループ構成は大学生 3 名、大学教員 2 名という構成であったため、この状況下での困難を指導する側、指導を受ける側の両面から集約することもできた。

まず、学びの当事者たる学生から、現状の就学状況の困難を挙げてもらったが、そこからは遠隔授業、オンデマンド授業へ適応できる者とそうでない者を分けるポイントが示された。オンデマンドはいつでも都合に合わせて授業が受けられる反面、いくらでも後回しにしてしまうことも許してしまう。対面でキャンパスに集い、学ぶことは、学友を前にした連帯感、責任感が生活のリズムや自己をコントロールする適度な縛りとなっていたと学生は述懐する。それに加え、報道でも話題にされる学生の課題疲れの問題も話題に上がった。先に述べた、先延ばしを許す状況が後々の課題疲れの原因とも考えられるが、学生ばかりに非があるとは言い切れない。教員たちは、学生が他の講義でどれだけの課題を課されているのか、周囲の教員がどれだけの負荷のある課題を課しているのかを把握していない。教員はこの状況下で十分な学習経験を担保すべく、責任感から十分な作業量、作業時間を見込める課題を課す。しかし、周囲の状況の把握や連携がとれていないがために、過度な作業量の課題が学生に集中、殺到してしまう。このことから、教員・学生間の連携はもとより、教員間での横の情報連携の強化が課題になることが浮き彫りとなった。

また、学生たちの不安は平常授業だけに限らない。その不安は特に実習に由来するところが大きい。参加した学生は、2 年生と 3 年生であったが、それぞれ各学年で学校現場に立つ体験が例年予定されていた。2 年で訪問した学校に 3 年次にも訪問するといった接続の機会も予定されていただけに、今回の外出自粛状況からこの接続が途切れてしまうことを強く懸念していた。仮に遠隔などで疑似的に実習に代わる体験を提供できたとしても、現場に立つことで生じる、複数の児童からの同時多発的なコミュニケーションは遠隔では再現しがたい。また、児童との物理的な距離感や接触のパターンは、相互の親密感を反映する。苦手な相手には距離をとるし、親しい相手と目上の相手では接触の仕方がことになる。これは心理学というパーソナルスペースであるが、遠隔状況ではこうした手がかりを使って児童とのコミュニケーションを調整することも困難である。

こうした学生から出た平常授業・実習での懸念を踏まえ、対人専門職養成の場として望まれることは、学生同士の模擬授業とは違う、本物の児童・生徒のフィードバックを受けながら授業力を磨く機会、現場の対人関係調整・適応（児童生徒はもちろんのこと、協働する教員も含む）の技術を学ぶ機会、授業以外の子どもの姿から子どもを深く理解する機会ではないかという結論に至った。この機会を得た学生の声や、学生の経験が一過性のものにならず、以後の学習・実習にもつなげられるよう、配慮していきたい。

## 看護教育における非対面状況での 対人援助の学びの可能性

福井県立大学看護福祉学部 大川 洋子

福井医療大学の森 透先生からシンポジウムのお話をいただいた時期は、遠隔授業の準備に翻弄され、私を含め ICT に慣れていない教員は必死の形相で未体験 Zone に突入していました。看護学の教育をどう

担保し国家試験の受験資格に備えるべきか途方に暮れつつ、文科省・日本看護系大学協議会による卒業時の到達目標を頭の片隅に置き、遠隔授業を実施しながら修正・改善するしかないと諦め半分で始動しま

した。また、看護実習は延期が決定し、コロナ感染のホットスポットとなる病院や施設での実習ができなくなる危機感は相当のものでした。そんな中、非対面状況での新たな教育実践の可能性を探る・・・どうしたものか。愚痴しかでてこない。

そこで、遠回りかもしれないが看護実習を見直してみました。看護実習では学生が一人の患者さんを受け持ち、健康障害の医学的理解とともに生活あるいは人生にどのような影響があるかという看護問題をアセスメントし、看護計画・実践そして評価する「Plan・Do・See」の学習プロセスによって対人援助を学びます。学生の学習を見直している間に、ジーン・レイヴィ、エティエンヌ・ウエンガー、佐伯胖(訳)による「状況に埋め込まれた学習」にたどり着きました。状況的学習は意味を獲得する参加の軌道の中で考える<sup>1)</sup>。しかも正統的周辺参加によって人(学習者)は実践者になる<sup>2)</sup>。つまり、学生は看護師とともにその看護の実践の場に存在しつつ(状況に埋め込まれる)、単なる見学者ではなく何らかの形で貢献できる存在として(正統的周辺参加)看護の意味や実践の文化を学習する。私が話題提供した養護実習や看護実習での学生の学びは、状況に埋め込まれた学習の成果であり対人援助の学びのプロセスであったと私なりに解釈しています。

このような実習に何とか近づけようと代替演習を強化することを否定するものではないが、各看護分

野の実習が約半年間のローテーションに組みこまれた学生に看護実践を省察する時間を十分に与えてきたか、長丁場で押し寄せる実習では学生の考えるエネルギーを奪ってはいないか等、看護学実習の恒久的な課題を考え直す機会が「今」であることに気づきました。実習代替の演習を矢継ぎ早に繰り返すよりもじっくりと考える学習、そして相手の意見を聴き共に考えるという省察を深め広げる学習、すなわち対人援助専門職としての本質的な能力を醸成するための学習プロセスが可能ではないかということです。

グループセッションで福井大学の教育学部生や大学院生の方から学びを組織する活動をオンラインに切り替えて実施しているという報告がありました。欠点もありますが、オンラインだからこそじっくりと自分の考えを醸成する機会であり、一人の学習者として成長しているという意見が印象的でした。今こそ対人援助を支える省察する学習を提供することではないか。形骸化していたFDに新鮮な血が一気に注がれた感じでした。

#### 引用文献

1. ジーン・レイヴィ、エティエンヌ・ウエンガー、佐伯胖(訳):「状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー」、p.108、産業図書、1994、東京。
2. 前掲書、p.109.

## 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Summer Sessions に参加して

仁愛女子短期大学幼児教育学科 増田 翼

2020年4月以降、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、保育者養成校での学習は新しい様式への変更を迫られています。特に対人援助職としての保育者を養成する際の大前提であった「対面授業」が中止となることで、パフォーマンスを獲得するための学習方法に大きな変化が生じています。従来の内容にもとづく方法や教材が制約されるなかで、各科目の到

達目標を維持しつつ、代替的学習方法を見出していくのはなかなか難儀なことです。このまま「遠隔授業」継続を余儀なくされるのであれば、そろそろ保育者養成の「質」をいかに保つか、といった議論に向き合うことも必要になるでしょう。

ところで、さらに深刻なのが、半年後には卒業を控える短大2回生の現状です。感染予防のために延期

しているものも含め「実習」が未だ3種別残っていますが（2020年8月時点）、これらが万全に実施できる保証はどこにもありません。保育者養成において必要不可欠な「実習」が延期となるなか、そもそも実習でしか経験できないことは何なのか、対面や三密状態の方法を取らなければ学習できないこととは何なのか、といった根本問題も浮上してきています。また仮に、例年通りの「実習」を実施せずに現2回生は卒業、となった場合、どのような弊害が起き得るのでしょうか。もちろん実習中止に伴う代替授業（演習または学内実習等）で、学生には例年と同程度の学習成果が身につくように目指さねばなりません。おそらく以下の点については影響が出るでしょう。つまり、子どもをどのように理解し（アセスメント）、それらをどのように実践と結びつけたり改善に向かわしたりするのか（省察）という「保育者の見方・考え方」や、保育者同士が情報共有しながら協働していく（同僚性・協働性）という「働き方」を身につけるためには、学内での代替授業だけでは限界があるとい

えるのです（これらの獲得を少しでも補うために、現在、新たな学習方法を模索しはじめています）。

さて今回、シンポジストとして発表準備をしながら、4月以降の混乱状況とこれから解決すべき課題を整理できました。また、当日のグループセッションでは、福井大学の学生さんから学友の存在の大切さ、スケジュール管理・進捗管理の難しさ、遠隔授業に対する要望など多岐にわたる想いを直接聞くことができ、たいへん参考になりました。このような貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げます。なお本学は、2018年度の「私立大学研究ブランディング事業」採択を受け、高校・短大・保育現場の三者間連携・協働によってシームレスな保育者育成環境を構築すべく取り組みを進めています。この事業の一環として、コロナ禍で求められる新たな保育者養成についても関係者間で議論を重ねることで、窮地を乗り越えていければと思っています。

## 看護実習に学ぶ

### ～社会教育実習必修化の年に～

明治大学 平川 景子

私は大学で社会教育主事課程の授業を担当しています。社会教育主事課程のある大学の教員と社会教育関係職員などで構成する、全国社会教育職員養成研究連絡協議会（社養協）の理事会で、福井大学の矢内琴江さんからラウンドテーブルのご案内があり、とくにZoneB2は社会教育職員の養成にかかわる人にも参加してほしいというよびかけでした。社会教育職員養成は、2020年度から新カリキュラムが施行され、実習が必修化していましたので、看護実習について学びたいと思い参加しました。

看護実習は、時間数や回数が長く、また今期については文科省・厚労省から「通達」が出ているということでした。病院も大学も感染拡大を恐れて実習ができない状況が続いている中であっても、看護職の専

門性に関する厳しい規制を満たすために実習に送り出す方途を探っておられるのがわかりました。とくに看護技術に関することは現場での実習が不可欠のようでした。

社会教育でそのような現場性にもとづく技術があるか考えました。「ファシリテーション・スキル」などということがありますが、私は技術を切り出して学ぶことはできず、実践の長い年月をかけた文脈とその経験のふり返りの中で培われていくものではないかと考えています。それでは、社会教育実習では何を学んでほしいのか。学生には、現場の職員と学習者の「関係」、それをお互いにどうとらえているかを感じてほしいと思います。また、その関係を育てるのに

必要だった長い年月を知って、時間軸をもって学習を「支援する」ことの意味を考えてほしいと思います。

「関係」についていえば、今回のご報告で、看護実習中に脳卒中の手術後の患者にかかわった学生の記録が紹介されました。半身が動かない現実に直面し絶望している患者の顔を拭きながら、実習生は「自分で顔を洗えるといい」と考えたそうです。そして最初は患者がベッドで顔を拭けるように、次には洗面所まで行って洗えるようにと、支援していったということでした。実習生は最初から意図していなかったかもしれませんが、実習の展開をとおしてみると、回復の目標を立て、自立に向けて支援することを、継続

的な支援によって実現していると思いました。こうした実習は、1年間に何度も現場実習を経験し、それを大学で省察しているカリキュラムの中で、実現しているように思いました。

一方で社会教育実習は卒業単位ですらなく、学生はカリキュラムの隙間を縫って実習に行くような実態なので、条件がかなり違うのだと実感しました。この困難の年にあっても、看護実習で当事者(患者・学習者)を支援する関係を学んでいたように、社会教育実習でも学生が関係を実感したり、見て学んだりすることを、なんとかしてめざしたいと思います。

## Zone C コミュニティ

### Zone Cを振り返って

福井大学連合教職大学院 天方 和也

Zone Cでは、前回2月の「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というメインテーマを継続し、「コロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓く」というサブテーマの下、地域やコミュニティの現状を聴き合い、一歩前に踏み出す手がかりを探り合うことや、これまでの実践の中にこそある学びを再確認することを主旨とし、Virtual Sessionという方法で開催しました。

懸念していた参加者数は100名を超える盛況で、オンラインによる効果を実感しました。また、事前にアンケートやオンラインによる準備会を実施し、初めてのオンライン会に備えました。当日は以下のように、趣旨説明・話題提供を受けて小グループのセッションを行い、それを全体で共有するというサイクルを2回行いました。

趣旨説明(10分) → 話題提供(3名 公民館主事 日本語教員 医療法人スタッフ 40分) →

小グループセッション①(5人×21グループ 60分) → 全体セッション①(20分) →

小グループセッション②(5人×21グループ 60分) → 全体セッション②(30分)。

話題提供では、公民館主事から企画しているコンサートと花火大会などの活動について、日本語教員からは外国籍の学生がコロナ禍で再入国ができないことやアルバイトの減少で収入はもとより生きた日本語学習の機会まで奪われていること、医療法人のスタッフからはこれまで継続していた市とのSDGsのコラボや無料相談会などがストップしており、リモートで可能な活動を模索している現状についての報告がありました。その後のセッションの様子を含め、全体像を事後の参加者アンケート(74名の方々から、熱い思いがこもった回答を寄せていただきました)によってお知らせします。

○ コロナ禍における地域コミュニティの意義、今後の在り方

・こんな時だから、と考え発信している他の実践を聞き励まされました。立ち止まる時が、事業を見直し考えられる時間 だったと気づかせて頂きました。

・参加して、公民館は「不要不急」の施設ではない、ということ、改めて実感しました。休館中に蓄えた力を活かしていただくことを期待しています。

・今年度「中止」や「縮小」した取り組みは、必要の無いことかもしれませんね。

・ポスト・コロナに向けて、私たちが何をすべきか。そして、これからどのように歩むべきか。そんな本質的な問いに向き合うきっかけをくれたのかもしれない。

・今の河合公民館の挑戦的な事業に対してエールをいただけたような感じがして嬉しかったです。

・持続可能な社会というキーワードが出てきて、話し合いながらこれからの具体的な策への展望へと議論が進み、今後のためになるような機会となり良かったです。

#### ○ オンラインでの会の在り方

・北海道から九州まで、学校の教員から公民館主事、大学生まで、100名以上。所属や職歴に関係なく、異分野の実践者によって築き上げられていくひとときは、日常には経験し難い稀有なものです。

・偶発性が人との出会いの醍醐味の一つだとすれば、それはオンラインでのつながりには生まれにくいように感じ、ウィズコロナの社会でそういった機会をどう維持していくかが、課題ではないかと感じました。

・少人数が同じ日時に各地から集まって、それをオンラインでつないで交流や研修をするという、リアルとオンラインのいいとこどりができたらよいなあ、とおぼろげにヒントがいただけました。

#### ○ 運営等について

・二回の準備会がありましたので、当日はさほど緊張することなく参加できました。

・私自身、Zoom をこのような形で使ったことがなく、トラブルなく出来るか不安でしたが、事前のサポートがあり、大変ありがたかったです。

・来月 Zoom でのオンライン講座を企画しているので、運営の先生方の進め方、小グループでのファシリテーターも勉強になりました。ありがとうございました。

・(全体セッションにおける) 富永先生によるファシリテーションは、その場にいる個々の持ち味を最大限に引き出しつつ、ジャズの即興演奏かのような印象。終了後の高揚感はずがのひとことでした。

コロナ禍によって、様々な活動・事業・団体等の根源的な存在意義を問われている中、地域のコミュニティもまた例外ではないようです。しかし、それにも関わらず地域において着実な実践の継続や、新たな試みが行われていることをこの会で認識・共感したという回答や、さらに今後の活動に対するヒントや意欲を得たという回答が多かったようです。

オンラインに関しては、今回が初めての試みであったために、居住地による制限がないなどの利便性及び今後の可能性に期待する回答が多かった一方、リアルでの語りと学びの良さを再認識する回答もありました。

運営に関しては、参加申込者に事前アンケートを募ることや、2回の事前準備会を設定したことが、オンラインという初めての形式への参加に対するハードルを低くし、当日のスムーズな運営に繋がったのではないかと思います。

今回のコロナ禍が、現代文明による自然破壊を起因とし、都会への過渡の人口集中によって感染が拡大されたことを踏まえれば、ウィズコロナの新しい生活の担い手としての地域やコミュニティの持つ意義と役割がこれまで以上に重要になってくると思います。そのためにも今回の ZoneC のセッションが、参加された皆様の今後の活動の一助となることを願っています。

## 考えさせられ、元気づけられたラウンドテーブル

岡山市教育委員会生涯学習課公民館振興室 内田 光俊

ラウンドテーブルで聞いた実践の中で一番印象的だった報告は、田んぼで打ち上げ花火イベントを企画して資金を集めて実行に移された、福井市の河合公民館職員の藤田さんの報告でした。その行動力は本当にすごいと感心しました。普段の活動の中で培ってこられた住民の皆さんとの信頼関係があったからこそでしょうか、職員の思いの強さが周りの人たちの共感と呼び、協力を生み、成功につながるのだと感じました。

岡山市でも公民館らしい仕事ができず、意気消沈する職員が出ていました。一方で、こうしてピンチの中でも住民や地域のために何か新たなことに挑戦しようという気概や発想力を発揮される職員がいる。私たちは「ピンチこそチャンス」を確信にしたいと思いました。

話し合いの中で出された話では、公民館に集まらない中で、はがきの裏面に絵などを描いてもらって公民館に持ち寄ってもらう取組みやマスクを集めて必要なところへ届ける活動、ケーブルテレビを使った公民館講座の発信、オンライン会議なども取り組まれていることが出されました。

一方で、高齢者はこうした手段を使いこなせない傾向があること、若い世代は会えなくても SNS など

で情報交流ができていることも共有されました。そのことから、ICT のスキルアップのための学習は、高校生が教える側になって高齢者とともに学ぶとか、三世代で共に学ぶなどの方法が有効だという話も出ました。

会えない中で地域活動についての合意を作ることが難しく、一部の人の相談で決まる傾向があり、不満も出がちだという問題も出されました。地域づくりのプロセスは、特にその中での対話や話し合い、合意形成の体験の蓄積を通じて住民の中に民主主義的な力を育て、それが自治の力になっていくものです。そのプロセスが難しくなっていくことははっきりしてきました。その困難を乗り越える知恵を出さないと、公民館は本来の力を発揮できません。

自治活動が担い手不足で後継者がいないなどの問題を抱えながら、若い世代、特に中高生などを担い手として役員の中に入れて、その声を活かしていく発想がありません。その現状を変革していくチャンスともいえると考えました。With コロナと言われる社会で、今の地域の在り方を望ましい方向に変容、変革していくチャンスだととらえて、積極的な取組みを考えていく必要があると考えました。

## 2020 年6月ラウンドテーブルに参加して

円山公民館 齊川 由香里

今年のラウンドテーブルは今、巷を騒がせているコロナの影響で、初の Zoom を使った開催となり、テストの段階から不安でいっぱいでした。事前のテストで、画面共有の使い方を学ぶも、実際に当日使えるかの不安がぬぐえないまま、20 日を迎えました。チャットのよくわからないままのラウンドテーブルスタートとなりました。今までは移動が面倒だなんて思っていたのですが、この時ばかりは、対面の方が気

がラクだと思ってしまいました。20 日 12:00、いよいよ接続開始の時間。まずつなげることができるのか？お聞きしていた手順のまま操作し、画面に知っている方々の顔を見られたときの安心は何ともいえませんでした。

小グループにわかれてのグループワークはいつものかわりませんが、お互いの顔は画面越しのため、不安でわけのわからない言葉を発している自分がいた

と思います。それでも、同じグループの方の協力を得ながらなんとかワークをこなせたことは本当によかったです。グループワークでは、日常の業務ではあまり接することのない職種の方や、願わくば、個人的にでもお近づきになりたいと思う学生さんなど、本当にバラエティにとんだ方々とお話ができて、楽しかったです。このラウンドテーブルは7回目の参加になりますが、いままでお見掛けすることない職種の方の参加が多かったように思います。その為か、新しい発言や気づきに出会うことができました。

1日目で特に印象的だったのは市内のこども園の園長先生のお話の中で「いまある状況の中で、やれることは何か、今やれる範囲ないでやれる最大限のベストを尽くす」という言葉でした。コロナの影響で、事業が足止めを食うなかで、できないと嘆くことは簡単ですが、嘆いてばかりもいられないので、事を進める必要があります、そのためには、今何ができるのか？ やれる範囲内で考えることが必要不可欠だと思いました。そしてもうひとつは、河合公民館の無観客コンサートと打ち上げ花火のイベント。一玉・3000円。たくさんは集まらないと思っていたが予想を超える

協力が得られたとの報告に、藤田主事さんの行動力と職員さんの団結力の強さがうかがえました。

2日目は、やはり教職員の方に囲まれてのスタート。ガチガチに緊張した私の報告を、穏やかな表情を浮かべながら耳を傾けてくださる皆さんの様子が映る画面を見ながらだったからこそ、無事に終える事ができたことに感謝しかありません。7年続けてきた「こども記者」の報告に、続けていることがスゴイと言われて照れくさくなりました。そして7回も壁新聞作っているならベテランさんですねという言葉も嬉しかったです。そして忘れてはならないのが、子ども達との距離の取り方。視覚や聴覚に訴えかける手法を取り入れながら子ども達の気をひく。やっぱり、現場で直接子ども達に向き合っている先生方のアドバイスはすごいと思いました。「子ども達の立場になって考えること」、そして自分も一緒に学んでいけたらよいと思います。

6月20日・21日にご一緒させて頂いた皆様、本当にありがとうございました。また、お会いできたらうれしいです。

## コロナ禍での学びが、大きな力になる

福井市中央公民館 塩崎 めぐみ

Zoomでのラウンドテーブル参加は、いつもとは違う緊張感に包まれスタートしました。ずっと画面に集中していたので疲労も半端なかったですが、コロナ禍での戸惑いや悩みを共有し、前向きにできることを形にしようとする参加者の皆さんにパワーをもらった2日間となりました。毎回感じるのですが、学生さんや学校関係者、福祉関係者など様々な背景をもつ参加者のなにげない発言にはっとさせられることが多々あります。また、自分の思いを言語化しようとする過程で、潜んでいたことが表面に出てくることもあり、喋っているうちに新しい発見があったりもすることがラウンドテーブルの醍醐味だと思っ

ています。グループのファシリテーターがお上手だったことも原因でしょうが、Zoomでも変わらず、その醍醐味を味わうことができました。小グループでの報告の際に、資料を画面共有する前提で作ってこられた参加者の方がいらして、スライドの見やすさや臨機応変な対応も勉強になりました。

心に残っていることは、なにもかもが例年通りとはいかない今だからこそ、事業の原点を見つめなおし、絞り込み、考え直すきっかけになるという言葉。そして、これからの社会教育はオフラインとオンラインを効果的に組み合わせ、ハイブリッド仕様でいかなければならないということ。仮にコロナが収

束したとしても、ニューノーマルな時代へ変化が求められていると感じました。

この原稿を書いているのは6月のラウンドテーブルから約2か月後、新しいことにもどんどんチャレンジしては、反省することしきりの今日この頃ですが、勇気ある一歩を踏み出すきっかけとなったラウ

ンドテーブルを思い出し、トライ&エラー！&リトライ！あるのみですね。残念ながらまだコロナは収まる気配を見せません。公民館がコロナ禍でも「つどい、まなび、むすぶ」場であることを深めていけるよう日々精進していきたいと思います。

## Zone D 授業研究

### パンデミックの中における国を超えた教師と子どもの繋ぎ

インドネシア Gloria Christian 小学校講師(2016年度教員研修留学生) Mala Manurung

It was a great opportunity to join the Fukui Summer Online Roundtable in the University of Fukui. My group is from Guatemala, Indonesia, Philippine and Myanmar. I was given an opportunity to share about the educational practices in Indonesia in facing this pandemic. We shared the practices in our countries facing this pandemic and got lots of key takeaways to be applied in our context. Even though all of us have different academic years, there are some similar strategies used to deal with this pandemic. One of them was how teachers should adapt and face the challenges in doing distance learning. One of the greatest points that I got was about how to optimize the interaction

between teachers and students in distance learning. We discussed simple steps to ensure students' interaction. Teachers could see many areas to be explored to make sure students can interact and learn at the same time. We are also thinking about some integration of subjects that could be done for making more authentic and contextual assessment for students. The discussion provoked me to explore more areas for students' learning and at the same time enforced me with educational technology issues. In conclusion, even though we are facing different boats, we are facing the same COVID-19 storm. It is good to know how we strive in dealing with this together.

# 福井大学ラウンドテーブルの振り返り： パンデミックで創られたコミュニティ

フィリピン Ateneo De Davao 大学講師 Miguel Carlo C. Marasigan

I had a wonderful opportunity a few weekends ago to participate in a roundtable organized and hosted by the University of Fukui. The discussion on the first day was mainly from three education practitioners from America, the Philippines and Japan. As I heard their responses during the discussion, I could not help but notice that while each of the speakers came from vastly different contexts, there were common threads that ran among their responses.

The discourse around responses to the COVID-19 challenge to schools and institutions, for example, led all three of them to discuss the importance of community and acknowledge that communication is critical to adjust, adapt, and adopt to the new normal in education. I was particularly taken by a quote from the Japanese teacher-speaker, who said, “Everyone in school and the community helped each other to resume learning for students and for the process to continue.” This statement explains why a strong relationship with parents and the community is critical to schools and the important role both parents and teachers play in student success, especially in the current environment where the pandemic crisis forms its shape.

The other thing that struck me during the presentations was the creativity and resourcefulness demonstrated by each of these three individuals’ schools. On several occasions there was a mention about rising up to the tests of this year and finding ways to

overcome obstacles that stand in the way of what was best for their students. Many from the speakers’ accounts acknowledged their school’s culture of trust, where the faculty are not the objects of change, but the agents of change. And along with their partners in the mission of teaching and learning, they embraced the coronavirus crisis’ challenges and elevated their roles to life-changers which had inspired the participants around the table such as myself.

The lessons I have learned resonated with me even up to the second day where the discussion continued. Although participants were grouped into smaller teams, the conversation just became richer and more intimate. Some of the sharings include transforming life outcomes for students and being committed to working hand in hand with parents, the community and other people in the profession to be agents of change amidst the present pandemic. In the end, the group wanted to make a difference, not necessarily in the world, but to the least the smaller world we were in at that moment. We hope our efforts will ripple and change the bigger world for the better, even for a bit. We come from all over the world in the group, but our common ideals and our roles as teachers overcome the barriers of language and culture, which had been the face of my experience in the University of Fukui’s round table.

# Opportunities of a Virtual Roundtable (オンラインだからこそできるラウンドテーブル)

福井大学連合教職大学院

マグラブナン ポリン アンナ テレーゼ マラヤ

パンデミックをきっかけに、ラウンドテーブルの実践には、より強いコミュニティー意識と意味形成が生まれてきました。The first virtual roundtable hosted by the University of Fukui through its Department of Professional Development of Teachers was held last June 20~21, 2020. It was held virtually in compliance with safety regulations against COVID19, and an initiative to redefine cultivating communities of practice opportunities under the pandemic. In preparation for this event, logistics were no longer limited to invitations, physical set-up, theme-related meetings, and paperwork. Stronger group support and mental readiness were crucial in being able to troubleshoot any unforeseen occurrences. I have been with Zone D: Lesson Study for the past four years. For this roundtable, we primarily had to ensure that everyone in the central committee is on board with Zoom. The committee has redefined the meaning of well-being and mutual support to carry out the roundtable. In addition, we discussed thoroughly the relevance of the theme to the participants. Is it because we are in the pandemic that is why we chose to talk about measures taken during remote learning? What is the essence of the topic now that basic education students are back in school? What would the participants want to hear and whom can we learn them from? How can we encourage participation and interaction in this virtual roundtable? How do we maximize opportunities for

connection in this online setting? Translation was one tough job to carry out but it was crucial in making connections and opening potential learning (e.g. a natural support system within Zone D from preparation days to the actual event).

パンデミックをきっかけに、国境のない実践を共有することと新興教育について話し合うことができました。Zone D: Lesson Study had three symposium speakers: Elizabeth Hartmann from Seattle, Satoshi Sawamoto from the attached elementary school department, and Kristine Dimaculangan from the Philippines. Hideaki Makita of Ago JHS served as the commentator. Ms. Hartmann shared different applications that they had utilized and stressed the importance of cooperation and collaboration in supporting students in this uncertain time. Mr. Sawamoto's presentation focused on establishing connections during difficult times. Ms. Kristine talked about how learning may happen anytime anywhere, and cultivating communities that strengthen learning communities. All three shared similar challenges from insufficient digital literacy to anxiety brought by unpreparedness. But they all emphasized the importance of acknowledging the difficulties and working hand-in-hand in solving them. In these difficult times, parents are partners; communities are partners; other stakeholders are partners. In the end, we asked, 'what is school for?' 'what is the real meaning of education?' 'where are we going?' as we

redefine education. Heading towards the forum, participants shared experiences and knowledge acquired from practices during the pandemic to understand how one is learning and how education is being reshaped for the uncertain future. It was a personal privilege to be with international teachers both for Saturday and Sunday sessions. We had participants from the US, Indonesia, Bhutan, Philippines, Myanmar, Guatemala and India who are either past international students of the university or their invited colleagues. The conversations had transcended from initial measures during the pandemic to efforts to transform their practices to make education more accessible and resilient to the constantly changing society.

成人学習 (andragogy) の1つの原則は、学習の設計とプロセスに参与する必要があることです。On the second day, my group was composed of a DPDT graduate, colleagues of current international students, and my colleagues from the Philippines.

We were situated in five different time zones: Japan, Philippines, Indonesia, Myanmar and Guatemala. We had agreed to take constant short breaks but not a long lunch break to make our remaining Sunday more productive. It is because it is Zoom that time was more flexible for everyone else. The discussions were light and fun but still insightful and meaningful. I must admit that virtual facilitation has stressed me before, but adult learners are capable of understanding circumstances and situating their learning. Two of the tricks that I have learned is (1) to be vocal on the design and expectations of the session, and (2) to begin from a light note of self-introduction to relax every member of the group. We decided that drinks and snacks were acceptable as we listened and discussed. By encouraging participation through a system, the participants became more active and engaged. And in a virtual environment, being straightforward and trusting is one of the essential keys.

## Zone E 探究

# 学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト ビジョン・ヒストリー・アウトライン

福井大学連合教職大学院 木村優

ビジョン

ハイパーコネクティビティ<sup>1</sup>とVUCA<sup>2</sup>の加速する世界のなかで、私たちは、ますます複雑で深刻な数々の問題に直面し続けていきます。それはたとえば、気候変動による自然災害、止まらない核拡散、グローバル規模の経済危機、有限資源の枯渇、ボトム・ビリオン (世界の最貧困層)、テロリズムの脅威、不正取引

と密売、サイバー犯罪、そして、COVID-19の猛威に象徴される未曾有のパンデミックなどです。これら現在の複雑で深刻な数々の問題を乗り越え、個人・社会・世界のウェルビーイングを実現していくことが、私たち一人ひとりに求められています。

そこで2020年3月末日、実践研究福井ラウンドテーブル (以下、福井ラウンドテーブルと表記) に新し

いセッション「ZONE E 探究」を立ち上げることになりました。これは、これまでの福井ラウンドテーブルでじっくりと築いてきた子どもたち・若者たち・大人たちによる共に学び合う関係を岩盤としています。

#### ヒストリー

この物語は、遡ること6年前の2014年初春、福井市安居中学校の生徒たちからの力強い「声」を私たちが聴いたところから始まります。

僕たちの/私たちの学びをラウンドテーブルで報告したい！

この生徒たちの声を真摯に受け止め、当時、安居中学校に在籍していた加藤学先生（現・福井大学教育学部附属義務教育学校）と福井大学連合教職大学院スタッフとで協力し、その年6月の福井ラウンドテーブルで初めて、安居中学校の生徒たちが多くの大人たちに混ざって学校紹介のポスター発表を行ったのです（福井大学連合教職大学院 Newsletter No. 65 参照）。2015年2月の福井ラウンドテーブルには福井大学教育地域科学部附属中学校（当時）の生徒たちもポスター発表にエントリーし、両校生徒の交流も実現しました。塾や部活動以外ではめったに他校生徒とかかわらない生徒たちが、互いの学びを聴き合い、意見を交換し合い、親交を結んでいく、そんな姿を目の当たりにした私たちは、学校を越えて子どもたちのネットワークを編み込み、子どもたちの学びと育ちを広げることで深めていける実感を得たのです。

続く福井ラウンドテーブルでも生徒によるポスター発表は継続し、さらに私たちは「生徒ラウンドテーブル」の企画を練り、広く福井県内外から中高生を招いて生徒各自の学びのプロセスと成果を公表するポスターセッション、中高生が探究の過程と成果を対話によって交換・交流するラウンドテーブルを開催していきました。

先の2020年2月にはSpecial Students Sessionと銘打ち、日本イノベーション教育ネットワーク（Japan Innovative Schools Network, 以下ISN）の協力を得ながら、探究学習に取り組んでいる中高生たちを日本全国から招き、学校における地域探究と

国際交流探究の経験を語っていただきました。そして、参加者同士で共に学び合うトークセッション、中高生が日々の学びと探究のあゆみを中間報告するポスターセッションとラウンドテーブル、そこに教師も合流して国内外の他地域をインターネットで結んで中継するパネルディスカッションを行いました<sup>3</sup>。

このように、6年にわたって継続してきた子どもたち・若者たち・大人たちによる協働探究とそこで結びついたネットワークにもとづいて、新しいZONE E 探究が生まれたのです。

#### アウトライン

さて、この長期にわたる学校と大学院による協働の歴史をふまえて、ZONE E 探究は6月20日（土）に向けた各セッションの企画や活動を通して、中高生・大学生・大学院生、各種学校の教師たち、大学等の教育機関や教育支援企業の方々といった幅広いメンバーが中核＝コアとなる組織構造をデザインしていきました。また、プロジェクトが単なるイベントにならないよう、ZONE E 探究が一つのコミュニティとして成熟する必要がありました。そこでZONE E 探究の活動を、「学びと教えるニューノーマル協働探究プロジェクト」として、参加者が主体となってプロジェクトを協働推進する実践コミュニティ<sup>4</sup>を形成することにしました。

具体的には、2020年6月20日の福井ラウンドテーブルを目標に据えて、5月半ばから表1に示したプレミーティング・セッションを重ねていきました。この企画の継続性によって、参加者のコミュニティメンバーとしての周辺参加を促し、さらに、参加者それぞれのネットワークをつないでプロジェクトの潜在メンバーを見つけ、招待することを可能にしたのです。また、プレミーティング・セッションは「出入り自由」とし、コミュニティの「垣根」を可能な限り低減することに努めました。

プレミーティング・セッションでは、そこで共創される「知」を把握共有するためにノートテイキング記録を確実にを行い、プレミーティング・セッション後に記録ノートをメンバー全員にメール配信しました。

この「知の世話」によってメンバーの新しいアイデアの創発を励ますと共に、本プロジェクトの行き先を明確していったのです。

さらに、COVID-19 によるソーシャル・ディスタンスの状況下で、福井ラウンドテーブルはオンライン開催と決まっていました。そこで、プレミーティング・セッションも同様にオンライン開催とし、メンバー各自のオンライン・ミーティングの経験値を積

み重ね、オンラインでの対話スキル・ファシリテーションスキル・ノートテイキングスキルの向上も狙いました。

第1・2回プレミーティングの目的は「チーム・ビルディング」、ネットワーキング・ミーティングとキックオフ・ミーティングの目的は「プロジェクト・ラウンディング」、第1・2・3回プレセッションの目的は「テーマ・セッティング」でした。

表1 プロジェクトのセッション・スケジュールと内容

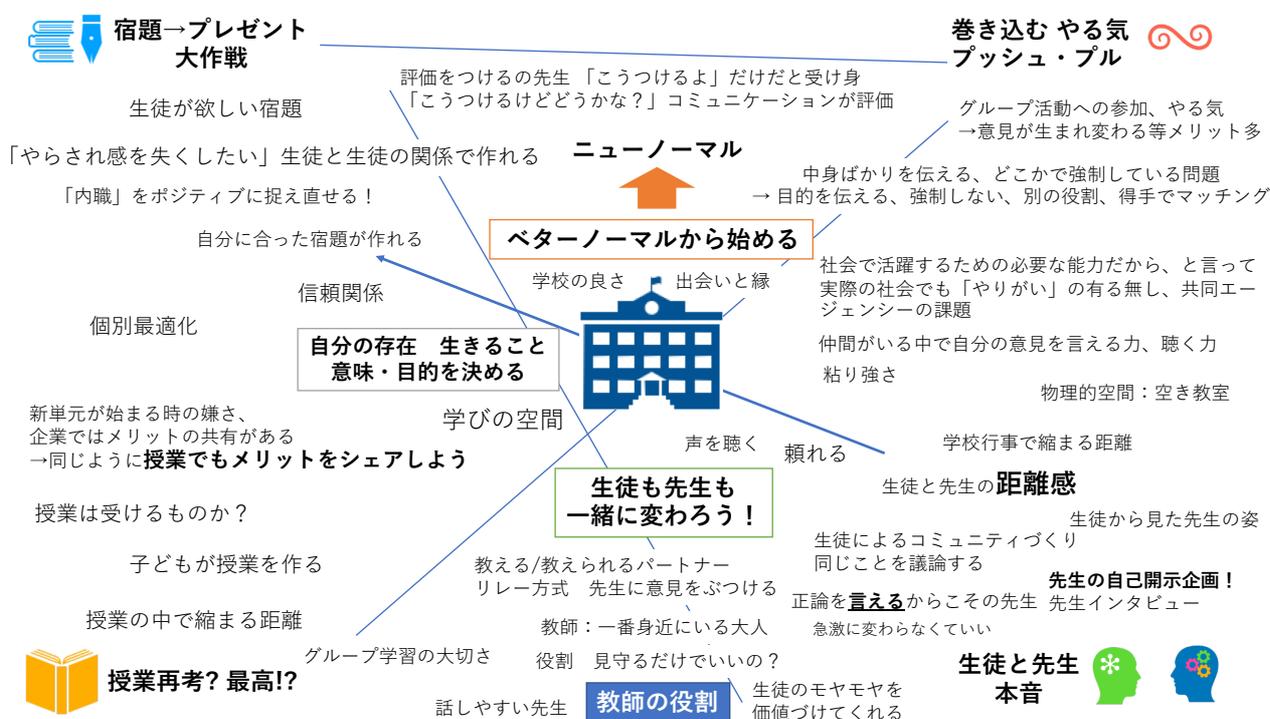
| 日程       | 時間          | 内容  | 参加者数 |
|----------|-------------|---|------|
| 5月12日(火) | 17:00-18:00 | <b>第1回プレミーティング</b><br>チームビルディング：ビジョン策定、手法のブレインストーミング  | 5    |
| 5月16日(土) | 15:30-17:00 | <b>第2回プレミーティング</b><br>チームビルディング：ビジョン共有、手法のブレインストーミング  | 28   |
| 5月19日(火) | 17:00-18:30 | <b>第3回プレミーティング</b><br>チームビルディング：ビジョン共有、ネットワーキング   | 20   |
| 5月23日(土) | 15:30-17:00 | <b>ネットワーキング・ミーティング</b><br>子どもたち・若者たちと大人たちによる協働探究企画のプレスト   | 35   |
| 5月26日(火) | 17:00-18:30 | <b>キックオフ・ミーティング</b><br>子どもたち・若者たちと大人たちによる協働探究のスタート  | 89   |
| 6月2日(火)  | 17:00-18:30 | <b>第1回プレセッション</b><br>学びと教えのニューノーマルの協働探究をはじめめる<br>：学校再開ビフォーアフター/生徒たちがやりたい授業とは？                                     | 113  |
| 6月9日(火)  | 17:00-18:30 | <b>第2回プレセッション</b><br>学びと教えのニューノーマルの協働探究をすすめる<br>：宿題・課題の存在理由を問い直す  | 125  |
| 6月16日(火) | 17:00-18:30 | <b>第3回プレセッション</b><br>学びと教えのニューノーマルの協働探究をふかめる<br>：ワークショップの探究テーマを共創する   | 158  |
| 6月20日(土) | 13:00-17:00 | <b>福井ラウンドテーブル 2020 VIRTUAL SUMMER SESSIONS</b><br>学びと教えのニューノーマルを協働探究する<br>：真の「学び舎」ニュースクールを目指して                    | 260  |
| 7月21日(火) | 17:00-18:30 | <b>ポストセッション</b><br>学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト 1.0→2.0<br><b>プロジェクト 2.0 キックオフ・セッション</b><br>：創りたい社会から受験のニューノーマルを協働探究する | 40   |

特にプレセッションでは、先行するセッションで次回セッションの協働探究テーマをみなで検討したことで、第1回「授業」、第2回「宿題」、第3回「ニューノーマル」とアイデアが生まれ、6月20日(土)福井ラウンドテーブルに弾みをつけることができました。

また、6月13日(土)から20(土)にかけて1週間、Students Virtual Poster Sessionsを開催しました。電子データで作成されたポスターをネットワーク上の共有ファイル(Google Slide)で掲載し、仮想空間にポスターセッション会場を設営したのです。参加者はどこからでもこの仮想の会場にアクセスすることができ、各ポスターを閲覧して互いにコメントやアドバイスを書き込んでいきました(Figure 2)。

ポスターは当日までに43集まり、ネットワーク上で事前にコメントを通してやり取りができたのです。

6月20日(土) Session IはStudents Virtual Poster Sessionsとし、ポスター発表者による探究の裏話を28のブレイクアウトルームに分かれて交流しました。Session IIはCollaborative Inquiry Workshopとして、プレ・セッションで積み上げてきた「学びと教えのニューノーマル」のテーマをフュージョンして「真の『学び舎』ニュースクールを目指して」というテーマでワークを行いました。そして、最後のSession IIIをWhole School Re-Design Labと銘打ち、各ブレイクアウトルームの対話と議論を中高生たちから報告してもらい、中高生たちの言葉を紡いで一枚絵にまとめていったのです(図1)。



この「学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト」の詳細はまた追って報告いたします。今回のZONE E 探究の立ち上げと挑戦を通して、私個人としても実に多くの新たな出会いに恵まれ、そして数え切れないほどのイノベーションの「種」を各地・各セクションに撒きこむことができ、と思っています。これからの「協働探究」をますます楽しみに、ZONE E 探究をさらにイノベーション、トランスフォーメーションしていきたいと思っています。

- 1 人と人とのつながり、移住・移民、テクノロジーの自動化・AI化によるヴァーチャルなつながりが爆発的に増すこと。
- 2 ビジネス用語で、現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility(不安定)、Uncertainly(不確実)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)の頭文字をとった造語。
- 3 当日の各セッションの詳細は、廣瀬志保(田村学監修)(2020a)「探究」を探究する(37):探究で伸びる資質・能力、月刊高校教育、2020年4月号、pp.78-81及び廣瀬志保(田村学監修)(2020a)「探究」を探究する(38):

続・探究で伸びる資質・能力, 月刊高校教育, 2020年5月号, pp.78-81 で紹介。

4 Wenger, E., McDermott, R. and Snyder, W. M. (2002) Cultivating Communities of Practice.

Boston, MA: Harvard Business School Press. (野村恭彦監修・櫻井祐子訳[2002]『コミュニティ・オブ・プラクティス: ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社)

## 生徒と教師と一緒に学びを創造していく

### ～ Zone E 探究を通して ～

福井大学連合教職大学院 血原 正純

この度、実践研究福井ラウンドテーブルの新しいセッション『Zone E 探究』の立ち上げに参画する機会をいただきました。私は第1回『学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト』を振り返ると、生徒と教師と一緒に学びを創造していくことの可能性とその意義を強く感じるとともに、オンラインであることを有効に活かした企画・運営と参加者の拡大だったと思っています。

1. プレミーティングとプレセッションから参加者が企図するプロジェクト型を新たに実践する

5月中旬、3回にわたるプレミーティングが開催されました。そこでは、幼小中高の教師と大学等の研究者や実践家教員、教育支援企業の方々によるビジョンの策定や共有等が図られ、大人のネットワークが築かれていきました。特に、ビデオ会議システムを活用することでオンライン化したことが、平日の17時からの開催でありながら、職場である学校やテレワークによる自宅等から現場の教師が参加することを可能にしたと言えます。

また、キックオフ・ミーティングからは、実際に子ども（主に中高生）たちもオンラインで加わり、6月の3回にわたるプレセッションは平日の放課後の時間（17時から）に、学校または自宅から子どもたちが参加をしていました。この3回のプレセッションへの参加者は毎回100人以上となり、その規模はすでにラウンドテーブルのセッション並でした。

以下は、私がキックオフ・ミーティングに参加後、木村優氏あてに送信した振り返りです。『ブレイクアウトセッションで中学生や高校生と話をし、学校で仲間と関わり合いながら学んできたことが当たり前で、初めは本当に、自宅にて一人で学習ができるのか不安だったという発言がありました。しかし、この3か月間、実際に一人で学習できた自分がいて、新しい自分に気が付きましたという言葉が印象に残っています。一方で、大学受験を抱えている現状で、日常であった友達からの情報がほとんどなく、学びの手応えを感じる事ができず、悶々としている自分がいることにも気付いていました。長い休業の中でも、子供たちは大きく成長を続けているということを感じ、改めて、このプロジェクトへの期待が高まりました。』

2. Students Virtual Poster Sessions で、生徒たちが自らの探究活動を発信する

探究活動の学びの中心は、子ども（園児・児童・生徒）たちです。子ども自らが学校生活や社会生活における課題を設定し、その課題解決に向けて収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進め、まとめ表現する学習活動にじっくりと取り組んでいることが、大変素晴らしいことと日頃より思っています。

今回のポスターは電子データであったことがこれまでと大きく異なっていました。また、1枚のスライドに仕上げたポスター形式のものがあり、数枚のスライドで構成されたレポート形式のポスターもあり、

スライドが数十枚にわたるものもあり、その多様さを感じました。43の探究活動のポスターによる発信に対して、私は賞賛の意を込めて、コメントをさせていただきました。

以下は、あるポスターに対するコメントです。『感染症対策について、生徒自らが考え、守るべきルールをみんなで決めていく取組は、現実の社会と直接つながり、社会の一員としての自覚と責任を学ぶことができ、すばらしいと思います。自らが学校生活をどう送っていききたいのか、主体的に考え、それを実行していく中で、一人一人の社会性も育まれていくのだろうと感じました。』

### 3. 2020 VIRTUAL SUMMER SESSIONS 学びと教へのニューノーマルを協働探究する

6月20日(土)はオンラインであることが活かされ、北は北海道、南は沖縄、さらに海外はフランスから参加するなど、その範囲はこれまで以上で、参加者数も260名に上り、オンラインでは大学内に会場を設けることができないほどでした。オンラインの強みである環境さえ整えばどこからでも参加ができる(国境を越えると時差はありますが)、移動の費用や時間もかからない、さらに会場を確保する必要がない等を、改めて実感させていただきました。

Session IではStudents Virtual Poster Sessionsが開催されました。本連合教職大学院コーディネーターリサーチャーの前田健志氏(楽しい学校コンサルタントSecond代表)が全体のコーディネーターを務め、和やかな雰囲気の中でSession Iが進められました。ポスターをエントリーした子どもたち(園児・児童・生徒)の数名がアピールや裏話を紹介していったアイスブレイクは、話し手と聴き手の関係を縮めるとともにこのセッションに参加していることへの自覚が高まった場面でした。その後、ブレイクアウトルームに分かれ、私のグループでは「カリタス幼稚園の取組」と「武蔵岡中学校の高齢者の生活援助をするペッパー(ソフトバンクが開発したロボット)」のポスター発表とそれに関するやり取りが展開されました。カリタス幼稚園の取組では、コロナ渦で園児が一切

登園することなく進めなければならない保育をどのように行っているのか、園の先生方の協働探究がスライド8枚で発表されました。この探究の発表に対して私は、以下のコメントをさせていただきました。

『園の先生方自身が協働して、子どもたちの学びをどのように支えていくのか、探究し続けた3ヶ月であったことが物語られていました。特に、特に教材を家庭に送り、子ども自身がどれの課題に取り組むのか選択させることにこだわったり、保護者の協力を得ながら、保護者の家庭から発信されたフィードバックをもとに子どもたちの学びを価値付けていったりしたことが大変すばらしいと感じました。』また、少子高齢化や核家族化、高齢者の一人世帯化の増加という社会が抱える課題をペッパーの活用で解決の兆しを見出していくためにプログラムを開発した取組を、取組に関するポスター2枚とアンケート結果をポスター1枚にまとめ、発表していました。この探究の発表に対して私は、以下のコメントをさせていただきました。『高齢社会の中で、ペッパーを使ってどのような生活援助ができるのか、計画とプログラムを開発して、実際に高齢者施設で実践してみて、それを社会に提案するという探究活動は現代社会に直結しており、社会貢献そのもので感心しました。』

Session IIはCollaborative Inquiry Workshopと題して、本連合教職大学院特命教授の福島昌子氏が全体のコーディネーターを務め、プレミーティングや3回のプレセッションで検討されてきたことが、OECD education 2030の学びの羅針盤を基に融合・統合されながら、当日のテーマ「真の『学び舎』ニュースクールを目指して」が設定されました。併せてワークの進め方についても提案されました。グループワークでは中学生、高校生、大学生、私立学園の先生、他県の教育センター指導主事の先生とテーマについて議論する機会をいただきました。子どもたちからは「宿題はプレゼントとは思えない。将来に役立つと思うが、めんどくさいし、いやだ。テスト時はありがたいけど、自分のやりたいことをしたい」や「休校中、オンライン授業と課題のみで、フィードバックがない。先生は一方向的に教える立場ではないとわかっ

ているが、他の方は理想の先生をどう考えているのか知りたい」等の発言があり、それに対して「優しい、教えるのが上手な先生」「モヤモヤした気持ちを言語化してもらえ。質問に答えてもらって、整理してもらえ。対話で深まる。そのようなことを先生に求めてきた。」と語られました。一方、教師は授業の再考について「真の数学とは、面白さとは何か、探究するとはどういうことなのかということ問い続けている」「一人で学ぶことに対してビデオ通話でやる気アップをねらってきたし、一人で学ぶことの方がはかどることもある。また、学校での学びに意欲的に取り組むには友達が存在が重要である。皆の中一人だけやらない状況でやる気を引き出すには、任せる部分をつくる必要があるだろう」と、その強い思いが語られました。この2つの語りが私の中で強く印象に残っています。これらは本音と言い難いにしても、子どもたちが求める教師像と教師が求める子どもたちの学ぶ姿を、互いに思い描くことができたのではないのでしょうか。私自身、このグループの語りを傾聴する中で、生徒と教師の共同エージェンシー、特に生徒と教師が本音で語り合う場・関係をつくることに、今後は力を注いでいきたいとより強く思うようになりました。

最後のSessionⅢはWhole School Re-Design Labと称され、ブレイクアウトルームの対話と議論を中高生たちが積極的に報告しました。私はその中で「生徒と先生の距離」を語る中高生に関心を寄せました。「先生の言っている正論が大人になってわかったり、親が言えないことを先生に言ってもらえたりしてきた」、「モヤモヤしたことを価値付けてくれる人間味のある先生を求めている」等の語りは、これからの教師としての在り方を示唆しており、私自身、真摯に受け止めさせていただきました。

今回、『Zone E 探究』の『学びと教へのニューノーマルの協働探究プロジェクト』への参画を通して、私にとって大きな収穫は、子どもたちの生の声を聴けたことです。正直、実際にこれまで勤務してきた学校のことを振り返ると、私を含め学校全体が子どもたちの生の声をほとんど聴くことはなく、授業や学校行事等を進めてきたことに気付かされました。そして、生徒と教師と一緒に学びを創造していくことは、生徒と教師の関係が学び手と教え手というこれまでの関係から、ともに学び合うという相似形の新たな関係を築いてくれるであろうと教わりました。

この先、学び合うという相似形の関係が、本音で語り合う場・関係をつくることにつながっていくのではないのでしょうか。

## やはり思考し続けることの大切さ

### 福井県立武生高等学校 辻崎 千尋

今回のラウンドテーブルは、教職大学院を修了してから初めての参加となりました。前代未聞の「コロナ禍による休校措置」により、約3ヶ月間の休校を余儀なくされ、その間、すっかりひきこもり生活に慣れた心と体でありましたが、参加してよかったと思っております。そして次回は必ず生徒を参加させたいと誓ったのでした。

#### 1. ある女子高校生Aさんの発表から

Aさんは「会うこと」という視点から、今まで考えていなかった授業のあり方を述べていました。学校は学力だけをのばすところではない、五感を通じて感じとっていたことがオンラインでは伝わらない、人間の本性は画面越しにごまかすことが可能である、などとまさに「肌」で感じた内容を具体的にかつ的確に自分の言葉で見事に表現するのです。彼女の話聞いていて、「学校」という場が彼女にとって大事な居場所だったこと、あらゆる活動の場であったこと、そしてそう彼女に強く感じさせる授業が展開されて

いたこと、が読み取れました。VR の話題が出たときに、彼女がこう言います。「考えることをやめたくない。」ああ、生徒もこう思うんだ、と安心しましたし、身が引き締まりました。思考を刺激する場であり続ける工夫を、私たち教員はしなければならぬと痛感しました。

## 2. 複数テーマを融合しながら現状を考える

ワークショップでの5つのテーマは、どれも教育現場で大事なものだと思いました。本校は授業改善PT というチームがあるが、ぜひそこでも話題にしたいテーマです。その中でも特に2「生徒と教師が本音で語り合う場」と3「宿題→プレゼント」に、というのが私と私が携わっている校務分掌の喫緊のテーマでもあります。3については休校中の悩みの種であったし、2は今まさにそれを立ち上げようとしているところです。

実は、休校中に私は日記の課題を出しました。感染症での休校など、人生でそんなに経験するものもなく、いつか自分の人生を振り返ったときに自分が何をして何を考えていたかを記録しておくことは意味があると思いました、実際に私自身も日記をつけていましたし、生徒からは「はじめは日記なんて、書くことないと思っていたが、やってみてよかった」という感想が多くを占めました。生徒にとってメリットは多かったようで、例えば、新聞を読み知識が増える、調べ学習ができる、K-POP の歌詞をハングル語で書いて独学で韓国語を学ぶ、などなど読んだこちら

が十分楽しませてもらえました。生徒たちは日々考え、日々何かをアウトプットしていったのです。はからずも日記という課題が、仕掛けになったようです。

今日のブレイクアウトルームでご一緒させていただいた中高生のみなさんは、学習意欲が高い方が多く、「ドリルやプリントで自分の知識や学力を確かめたい。」という意見がある一方で、自分で教科書をまとめる方が自分には合っているという意見もありました。こういうところでも個人差は出ます。授業でも同じで、どこに焦点を合わせるかは難しいし、このコロナ禍において、どういう方法で何をさせてどんな力をつけるのかということに正解はありません。できることを精一杯するだけなのです。それは教師集団が短い期間で何をどう考えたかが問われることをも意味します。やはり思考が重要なのです。

## 3. 最後のまとめから

最後は、児童生徒の発表とチャットの内容がどれも印象的でした。特に、男子高校生 B さんのコメントは秀逸で「日本人は空気を読んだり、与えられた仕事をこなすのは得意だけど、それでは今求められている変化をおこすことはできず、しっかり自分で考えて考えたことを相手に伝える力をつけられない」という内容は、真理以外の何物でもありません。また、チャットでも「大変だけど常に考え続けられないいけない。」というフレーズに目がきました。そう、やはり思考し続けられないいけないのです。

# Zone E「学びと教えのニューノーマルを協働探究する」 に参加して～生徒の可能性が大きく拓いていく学び～

ミドルリーダー養成コース1年/武蔵岡中学校 菅野 多岐子

## 1. 生徒の変容①

ラウンドテーブルには、本校生徒5名とともに参加をした。準備期間当初の生徒たちは、指示待ちで、

自分の意見をもてずにいた。しかし、次第に当時の世情に関心を持ち各自で情報収集してくるようになった。そして、得た情報をもとに自己の考えをもち、そ

れを相手に伝えるようになってきた。初めは、互いに自分の考えを伝えるに留まっていた話し合いも、相手の考えに対して質問や自己の考えを述べるができるようになっていった。この変容は、後に記述するプレセッションに参加をした2名の女子生徒の存在が大きい。

## 2. ラウンドテーブル参加への教師としての狙い

プレセッションに参加している学生の多くは、しっかりと自分の考えをもっており、それを周囲に臆さずに言うことができている。その様子を目の当たりにし、私には不安がよぎった。本校の生徒は、9年間単学級という環境で過ごすため、外部との繋がりはほぼない。また、自己の考えがあっても、それを発信する場も限られており、「積極的に発言できる子」というイメージのある生徒以外は、そこからの脱却を自ら図る機会は日常では見つけにくく、容易ではない。

参加した5名は、比較的大人しく真面目な生徒で、考えがあっても言いたいのに殻を破れずに言えないような生徒であった。それを本人たちも自覚しており、殻を破る難しさを感じているようだった。しかし、同時に変わりたいという思いももっており、参加を募った時点で、自ら申し出てきた生徒たちである。

そこで私は、今回の経験をきっかけに、同世代の学生と関わり刺激を受けてほしいというのが狙いの1つであった。その場で自分の思っていること発することで、現状を変えるきっかけになることを実体験してほしいだったのである。そして、自信をもってあらゆることに自ら積極的に関わる楽しさを知ってもらいたいというのが2つ目の狙いであった。

## 3. 生徒の変容②

特に2名の女子生徒について述べる。本校ではGoogle meetを使用して学活を行っていたが、意見を交わし合うという機会がほぼなかった。そうした中で迎えた、初のプレセッションとブレイクアウトセッション。同室で隣同士に座り、私も同じ場所にいる環境で行った。さらに、安心感が発言のしやすさに繋がるだろうと、生徒と私を同じブレイクアウトルー

ムに設定していただいたのだが、想像以上に互いに譲り合い、依存し合い、自ら発することができなかったのである。

生徒はプレセッション後、落ち込んでいた。理由を聞くと「思っていた以上に頭が真っ白になって何も言えなかった。考えていても、自分が当たった途端に何も言えなくなってしまった。こうなるとは思わなかった」と。一方で、「きっと同じ部屋にいると頼ってしまう。自分一人ならば、やるしかないから今日よりも頑張れるかもしれない」とも言っていた。その言葉を聞き、彼女たちの変わろうとしている気持ちと、内に秘めている意思の強さを感じた。上手いかずに落ち込んだ経験から、その原因を探り、自ら改善策を考えた2人に対し、教師として必ず成功体験と、自信をつけさせたいと決意した瞬間だった。

そして迎えた翌週のプレセッションのテーマは、「宿題」。参加者が宿題について、本音で語り合うものであった。今回は、生徒に事前にテーマを伝えてあったので、自分なりの考えをまとめておくことができた。また、一人一部屋で参加することで、自分で何とかする度胸も備わった。そして、考えを自ら述べることができた。

しかし、ここで次の課題にぶつかるのである。それは、人の考えを聞き、それに対しての質問や感想・新たな考えを述べるのは難しさだ。話し合いは、一方通行ではなく互いの考えについて討議したり、共有したりすることで、より深まると考える。しかし、本校の生徒は自分の考えは伝えられたが、それに対し一歩突っ込んだ質問や考えを問われると思考が止まってしまうのであった。この経験は教師として今後の生活の中で、生徒へ投げかける「問」の仕方を考えさせるきっかけとなるものであった。

## 4. 終わらない学び

ラウンドテーブル終了後、参加生徒と省察を行った。確実に自信をつけており、他校のポスターセッションから刺激を受けていた。ある生徒は、地域貢献をしている発表を聞いてきた。そこで本校での地域貢献の取り組みを聞かれたが、その場で答えることがで

きなかったと感想を述べた。それを聞いた他の参加者は、ラウンドテーブルに参加した自分たちにしかできない地域貢献を考えようと、企画を計画し始めたのだ。さらには、全校生徒にその企画を伝えるためのお知らせ作り、教員に理解と協力を得るための企画書を作成した。そして、生徒自ら教員へのプレゼンと、全校生徒への参加の呼びかけを行うと言い出した。そして、「お世話になっている地域の方に手作りマスクとエコバックを作ろう」という企画を見事にやり遂げた。

この時間をともに過ごしながら、改めて生徒の未知なる力の可能性を目の当たりにした。もちろん、順

風満帆だったわけではない。大忙しの毎日だったが、楽しそうだった。そんな生徒の様子を受け、協力する友人が現れるようになっていく。5人のコア・メンバーに新たに2名が加わった。さらに毎回多くの参加者が集まり、常連メンバーが出てきて校種を超えた生徒同士の繋がりが出来上がっていった。そして、総勢30名近くの参加者と完成させたマスクは約100枚、エコバッグも30個以上となり、完成品を地域の方々に届けることも実現した。

今後は、今回の5名の生徒の活動をどう後輩たちへ継承していかか、私の課題であろうと感じている。そのために何ができるか、私も学び続けていきたい。

## New normal は動き続ける

学校改革マネジメントコース1年/東京大学教育学部附属中等教育学校 大井 和彦

時機として日本は教育的話題では新学習指導要領施行・大学入試共通テスト開始という流れの中で、新型コロナウイルス・パンデミックによる各学校の一斉休校が起こった。そこで心から湧き出てくる本音を教員・生徒・研究者を隔てずに語り合うという会が今回の Zone E であったように思う。

—子どもたちの声を聞きながら大人が省察する機会として……ヴァーチャル・ポスターセッション—

その題材として、全国各校(幼～高の全校種)より、日ごろの学びをメタ認知したヴァーチャル・ポスターセッションが開かれた。私は、参加校として発表をするために、休校期間中に生徒に声をかけ、三人の女子生徒が賛同してくれた。この Zone E はラウンドテーブルにおける新たな試みであったこともあり、プレセッションが数回開かれたのだが、彼女たちはその中で発表内容に迷い始めた。そこで、率直に休校期間を経て改めて感じていることを発表してみたらどうかと数度の Zoom 打ち合わせを経る中で話したところ、“青春したい”“中高生における「協働」による「探究」的な学習+責任と大人の関わり”“会う

会わない 会えない”と、三者三様のテーマが出てきた。これらを一つにすることは難しいと考え、運営スタッフの先生に相談して、それぞれ別個に発表することをお願いした。よくこれらのテーマが出てきたと思うが、実際には私は教員として彼女たちに内容・発表方法とも一切指導をしていない。むしろする必要が無かった。ここまで子どもたちは地に足をつけて自由に発想し、みずから引き付けることができるのだという姿が見えた一方で、それだけ潜在能力のある(そして実際に発揮している)子どもたちに対して、教員という存在は何を為す者なのかという大きな問いが頭をもたげた。これまでの関わり方も教員側も正義感と義務感から与えていく側として一律的ではなかったか。昨今、教員の働き方改革も大きな話題となっている中、一人の人間として生きていく教員の well being をどのように考えるか。そんな問いが沸々と沸き起こった。

—それでも現実に直面しなければならない状況……受験というシステム—

上記の話題の一方で、受験を控えた中三・高三の生徒のみなさんは、やはり不安を覚えていることが明

確に共有もされた。授業がなかった分、苦手科目への時間をかけることができたが、SD への配慮から先生へ質問に行きづらかった……しかし、オンラインの利便性は今後有効的に活用されるべきである、などまさに心の声が聞こえた。また、下級生においても、先に記した教育改革の流れの中での不安を抱えている生徒も多くいることが見えた。そして、その議論の方向性は、日本における教育システムそのものへの問題提起へと繋がった。その問題提起が今回生徒から発信されたという事実が Zone E の開かれた大きな意義の一つになったように思う。

—歩みを止めない New normal への志向—

私の好きな問いのフレーズに「教育がどのような営みであることを私たちは望むのか」(今井康雄)というものがある。今回の議論を端緒に人間が人間によって人間になっていく営みとしての教育に、当事者として子どもたちが加わった。

この過程がまさに Better normal →New normal のプロセスであると感じられた。生徒と教員との“想いの摺り合わせ”が今後の教育の New normal を創っていく営みとなっていくと思われた。最終的に未来の社会を生きていくのは生徒達であり、そこに向かって共に歩いていくためにもっとこのような議論をしていって良いのだという勇気を私たちは得たように思う。

そして、今回 OECD の田熊美保氏よりいただき、新たに私の好きなフレーズが増えた。

New normal ≠ New model

モデルとして不動の定型となるのではなく、行雲流水のごとく、存在としての“雲”“水”でありつつもしなやかな思考発想を持ち続けたいと意を新たにした。

【編集後記】今号では、6月に実施したラウンドテーブルの Zone Sessions の振り返りを特集としました。ご多忙の中、多くの皆様に原稿をお寄せいただき、たいへん読み応えのある号とすることができました。各 Zone では、コロナ禍の下での当面の対応ばかりでなく、コロナ後をも見据えた、子どもたちや専門職、コミュニティのこれからの学びについて議論されました。これまでの当たり前に関わらず学び続けること、そして学び続けることのできる力を育てていくことの大切さを改めて実感させられたラウンドテーブルであったと思います。(I)

---

教職大学院 Newsletter **No.139**

2020.11.14 内報版発行

2020.11.24 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp

---